# 召喚師の旅路

杉村祐介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
召喚師の旅路

【Ｎコード】
Ｎ２０２９Ｒ

【作者名】
杉村祐介

【あらすじ】
召喚師、それはカードに封印された魔獣を呼び出せる特殊な種族。
ひょんなことから、召喚師サモンと少女リトルは出会う。
魔法王国の騎士ジン、サモンとは別のカードを持つ青年トランス……。
二人は出会いを繰り返しながら、世界各地を旅していく。
愉快な冒険ファンタジー！！
＊一言感想、酷評、なんでもお待ちしております！

# 少女と竜と召喚師

「じゃあ、元気でな」
虫の音が聞こえる闇夜の森に、二人の少年が向かい合っていた。月を隠していた雲は風に飛ばされ、互いに相手の表情が確認できるようになる。二人とも髪は夕日のような橙色に染まり、目は炎のような赤い色をしていた。似たような顔立ちの二人だったが、身長は１０ｃｍほど開いていた。
「兄ちゃん！」
「心配するなサモン、俺には仲間がいる」
兄ちゃんと呼ばれた身長の高い少年は、ポケットから二枚のカードを取りだす。それを横にゆっくり振ると、少年の後ろにうっすらと影が二つできた。一方は黒いマントと目の下辺りまで隠すフードを身につけ、不適な笑みを浮かべる男。そしてもう一方は、太い足を大地につけ、両肩の翼を揺らしている紅い竜。
「でも、でも！」
サモンと呼ばれた少年は、泣きそうになるのをこらえて訴える。自分がどれほど心配しているかを。自分も力になりたいということを。
だが兄は、頭を優しくなでる事しかできなかった。自分に課せられた使命を、命を懸けても果たさなければならない。それは運命でもあり、呪いでもある。
「サモン……」
兄は二枚のカードの片方を、弟に渡した。さっきまで彼の後ろにいた竜は、闇に溶けるように消えた。少年は涙で潤んだ目をこすりながら、兄の最後であろう言葉を受け取る。
「俺の分身だと思って持ってろ。これで怖くないだろ？」
兄から渡されたカードの中央には、先ほどまでいた紅い竜の絵が描かれていた。少年が小さくうなずくと、兄は悲しげに笑顔を作り、

背中を向けてゆっくりと歩き出す。
「オレ……絶対旅に出るから！」
少年は背中を向けた兄に叫んだ。
「旅に出るから！　兄ちゃんを助けに行くから！！」
兄は何も答えなかった。少年は、兄の姿が見えなくなるまで叫び続けた。右手のカードの温もりを感じ取りながら……。

馬車がぎしぎし音を鳴らして森の道を進む。時折聞こえる鳥のさえずりや、甘い花の香りを持ってきたそよ風が気持ちいい、と彼女は思った。だがそれも、隣にいる筋肉質な男のいびきで台無しだが……。
彼女はリトル。長い茶髪をポニーテールにくくり、黒い瞳はキラキラ輝いている。顔立ちも良く、俗にいう「可愛い」少女だ。リトルは青い布製のシャツとミニスカートに、上から戦闘用のベストを着て、腰には愛用の銃二丁を下げている。数年間の間、自分の命を守ってくれている相棒だ。
リトルは人々が町から移動するとき、魔獣の脅威から命を守る護衛職というのについていた。今日も馬車の中に乗っている下級貴族を護衛しているのだが、たいてい何も起きずに仕事は終わる。その割に給料は高額なところが、彼女がこの職についた一番の理由だ。
今彼女は、馬車の中ではなく後ろについた出っ張りの部分に、見知らぬ男二人と腰を下ろしていた。真ん中にイビキをかいて眠っている男が、その両脇にヒョロっとした男とリトルが座っていた。
「どこかに新しい出会いでもないかな」
彼女は１７歳。青春真っ盛りの年頃である。それなのになぜ暑苦しい男の隣で過ごさなければならないのか。もたれかかって来る男を反対側に押し返すと、もう一人のひょろっとした男は巨体に押しつぶされてしまった。

馬車はゆっくりと、森の道を進む。

すると道の途中で、オレンジ色の草が見えた。それを注意してよく見ると草ではなく、道端で倒れている、リトルと同じくらいの歳の少年だった。

リトルは軽い身のこなしで馬車から飛び降りると、倒れている少年に駆け寄った。馬車の運転手は彼女が降りたことに気付き、手綱を引いて馬車を止める。

「大丈夫？　けがでもしたの？」

リトルの言葉に、少年の返事はない。だが代わりに少年のお腹が大きく鳴った。彼女はホッと一安心すると、馬車の運転手に話しかけた。

「私、あの人の看病してから行きます」

「魔獣は大丈夫なのか？」と運転手は言ったが、リトルは笑って返事した。

「後ろで寝ているあの人達も、ただの飾りじゃないんですから」

その言葉に、運転手は納得がいかない顔をしていた。まぁイビキ男とヒョロっとした男の二人組じゃあ、不安にならない方がおかしいのだが、リトルの説得にしぶしぶ馬車を進めた。

リトルは少年に駆け寄り、自分のカバンから弁当……おにぎり三つを出した。

「さあ、これ食べて」

彼女はその弁当を少年に渡すと、自分はおやつの乾パンを口にほうり込む。少年は目の前にあるものが食べ物だと理解すると、体を飛び上がらせて食事を始めた。

「あなた、名前は？」

勢いよくがっついている少年に質問するが、返事はない。リトルはあきれた顔で座り込み、三角座りで食事が終わるのを少し待った。

「いやー、ありがとな！」
オレンジ髪の少年はニッコリと笑って言う。リトルの弁当は全部彼の腹に入ってしまった。
「オレ、サモンっていうんだ」
「私はリトル」
彼女はさらっと自己紹介を済ませると、サモンの格好をまじまじと見つめた。オレンジの髪に赤い瞳、そして腰の左側には不思議な魔力を感じる剣が下げられていた。さらにリトルより背が低い事から、年下と思われる少年が、敵に囲まれやすいこの森を、一人で移動するのはかなり危険な事だ。この森を抜けるには、大人でも二人は必要だった。
そんな考察をしている最中、サモンが口の回りについたご飯粒を、つまんで食べながら言った。
「弁当、手作りなのか？」
「あ、うん」
彼女は「よく気づいたなぁ」とサモンのことを内心誉めながらも、馬車とあまり離れたくなかったので、無駄な話はしないように心がける。
「じゃあ近くの町まで送るから、ついてきてくれる？」
サモンは素直にＯＫを出してくれたので、二人は馬車を追いかけることにした。

「しっかし」
「どうかした？」
森の道を走っている途中、サモンは鼻をヒクヒクさせて言う。
「さっきから魔獣の匂いを追いかけてるみたいな気がするんだよな……」
その言葉に、リトルは馬車が襲われていることを直感的に感じた。今までサモンにあわせて動かしていた足を、さらに速く動かした。
「おぃ、待てって！」

サモンは全力で走って追いつこうとしたが、あまりの速さにどんどん距離が離されていく。
リトルは風を纏うように、ぐんぐんと進む。

森の中にある、少し開けた場所に馬車は止まっていた。車輪は攻撃を受けて壊れ、破片が辺りに散らばっている。馬車の回りには狼が十数匹くるくる回って、襲撃のチャンスを伺っていた。今のところはイビキ男とヒョロい男の二人がしのいでいるようだが、二人共限界に近かった。
「ごめんなさいっ！」
横から銃弾と共にリトルが突っ込み、数匹の狼をけちらす。
「依頼主は！？」
リトルの問いかけに、イビキ男が馬車を指差した。運転手と一緒に隠れている見たいだ。安心した彼女は両手の銃を構え、二人の同業者を鼓舞した。
「さあ、反撃するわよ！」
リトルは次々と銃で撃ち倒し、イビキ男は手斧を振り回した。ヒョロい男は杖を出して、攻撃魔法を放つ。三人は馬車から離れつつ、次第に狼の群れを倒していく。だがその状態も長くは続かなかった。
「ガルルル！」
ヒョロい男の横から、魔獣の太い鳴き声が聞こえた。と同時に彼は何かにぶっ飛ばされ、空中で三回転したあと地面に激突する。
現れたのは、今までの狼より一回り大きい体つきの、銀白の毛をした魔獣だった。そいつが大きく雄叫びを上げると、今までやられっぱなしだった小さな狼たちの動きが変わった。より俊敏に、狡猾に、彼女たちに襲いかかる。
イビキ男は銀白の狼に斧を向けて、力一杯振りおろした。だが狼は自分に当たる直前で、前足で払いのける。その一撃で自慢の斧は

真っ二つに砕けた。
「なに、こいつ……」
リトルは初めて見る魔獣の、圧倒的な力に驚いた。ボスは目の前の男を突き飛ばすと、鋭い眼を彼女に向けた。そして、部下の復讐という意味だろうか、狩りの獲物を仕留める喜びからか、怒りと笑みを顔に浮かべながら、牙をむき出しにして突進してくる。リトルは攻撃をかわそうと思ったが、体が恐怖で動かない。
やられる……そう思ったその時。
「まったああぁぁっ！！」
青い空から声が聞こえた。声の主はリトルの目の前に降り立ち、右手の剣で狼の鼻を一閃する。魔獣は悲鳴を上げ、血が吹き出している鼻を抑えながら悶えた。
オレンジの髪が風に揺れる。少年は後ろを振り向いて笑って言った。
「やっと見つけた！」
「サモン！？」
少年の後ろでペタンと座り込んでいるリトルは、頭の上に？マークを浮かべたような顔をしていた。
「あなた、空飛べるの……？」
サモンは背中を向けながら首を横にふる。そして左手をポケットに突っ込んだ。
「オレには、空を飛べる仲間がいるんだ！」
ポケットから左手が出る。その手には五ミリほどの薄い板……いや、分厚いカードが、持ち主の瞳のように赤く輝いている。そして、中心には回りの赤よりさらに「紅い」竜の姿が描かれていた。初めて会った時に感じた不思議な魔力は、剣ではなくこのカードが出していたものだったと、リトルはこの時気付く。
「いくぜ、ディノ！！」
サモンは叫びと共に、カードを上から下に振りおろす。するとカードの絵から魔獣が飛び出したかのように、描かれていた紅い竜が、

少年の横に姿を見せる。
屈強な後ろ足で地面に立ち、翼を広げて威風堂々としている。体長はサモンと同じくらいだったが、開いた翼がさらに大きく見せる。長く美しい尻尾がゆれ、その先には白いトゲがある。どれも真紅の鱗に包まれて、まるでこの魔獣そのものが一つの炎のようだ。
「グォォオ！」
少年と同じくらいの大きさの「炎」は、咆哮したあと翼を使って空へ向かう。そして銀白の狼に向かって、火炎弾を口から出した。狼は寸前でかわし、雄叫びをもう一度上げる。一度目とは違う感じのそれは森に響きわたった。
サモンは戦いを紅い竜に任せ、イビキ男を叩き起こし、ヒョロい男を担いで数十メートル離れた馬車に運んだ。
「リトル、なにボケッとしてるんだよ！」
馬車に男を乗せた彼は、リトルの近くへ行く。そして、サモンの登場から半ば放心状態だったリトルを、軽々と担ぎ上げた。
「ちょ、何するの！？」
「いいから黙ってろって」
サモンはカードを、紅い竜に向ける。すると竜は吸い込まれるように元の居場所へ帰っていった。
「んでからもう一度っ！」
彼はまたカードを振る。竜紅い竜は解放されると同時に、翼を大きく羽ばたかせた。空へ飛び立つ直前に、サモンは担いでいるリトルと一緒に、竜の尻尾にしがみつく。そして竜は馬車を前足でつかむと高く高く昇っていった。

地上では、さっきの狼の仲間がやって来て、空に向かって吠えている。その数は五十匹くらい集まっていて、あの場所で戦っていたら確実に負けていただろう。
「サモン、この事わかってたの？」
リトルの質問に、彼は答えなかった。ただ声を出して笑って空を

見ていた。

しばらくして彼らは、近くの町に着陸した。馬車をおろした竜はカードに戻っていった。

「君、仕事をさぼるとはどういう精神なんだ！」

怒鳴っているのは、馬車に乗っていた貴族、今回の依頼主だ。スーツ姿にちょび髭をはやした貴族は、リトルに怒りをぶつけていた。

「本当にすみません！」

彼女は自分のせいでピンチになったのは事実だったので、ただ謝るしかなかった。

「もう君には頼らん。好きにしろ！」

「ええっ……！」

要するに、クビ宣告だった。リトルはひどく落ち込み、力なく座り込んだ。

貴族は次にサモンに近より、礼を言った。

「ありがとう。君のおかげで助かったよ」

貴族はサモンに袋を渡した。中にはリトルに渡す予定だったお金が入っていた。

「これからも私を護衛してくれないかね？　そうすればこの倍の金を払おう」

サモンは貴族が、竜のカードをチラチラ見ている事に気づいた。そして隣で座っているリトルを見る。

「わりぃけど、やめとくよ」

彼はそう答えたが、貴族は離すまいと詰めよってくる。

「なら、三倍、いや五倍出そう。どうだ！？」

「オレ、貴族嫌いなんだよな」

サモンは即答し、さらに一言付け加えた。

「人のもの売って金儲けしようとするとこがな」

貴族は自分の思っていたことがバレていると気付き、しぶしぶ手を引いた。そして二人の護衛と一緒に、足早に町を出ていった。
サモンは落ち込んでいるリトルの横に座ると、少したってから話をした。
「兄貴を、探してるんだ」
リトルは黙って聞いていた。こんなに強い少年が、なぜ旅をしているのか聞きたいと思ったからだ。
「兄貴はかっこよくて、強くて優しかった。だけど十年前、旅に出ていったんだ」
サモンは急に立ち上がり、胸前で拳を握る。
「兄貴に追い付きたい。だから旅して、強くなるんだ！って決めたんだ」
そしてサモンは、リトルの眼を見て言った。
「ついて来てくれないか？　護衛じゃなく、仲間として！」

「えーっ！？」

リトルは言われた意味を理解すると、大きな声で叫んだ。
「何で急に……しかもまだ会ったばかりの私を？」
当然と言えば当然の質問に、サモンは笑って答えた。
「また、お前のおにぎり食いたいからな！」
リトルは、ニコニコしている彼を見て、自分も笑いが込み上げてきた。そして彼女は言った。
「いいよ。私も人探ししてるし、おにぎりくらい簡単だからね！」
彼女も立ち上がり、少し背の低い少年を見る。
「これから、よろしくね！」
「あぁ、よろしく！」
サモンは満面の笑みを浮かべて言った。

「ところで」
リトルがサモンに聞く。
「歳いくつなの？」
「十八だけど？」
彼の答えに、もう一度サモンを見た。身長もリトルより小さく、体つきも少し子供っぽい……リトルにはどうしても、サモンが歳上には見えなかった。

## 魔法と手紙と人の思い

森で出会い仲間になった彼らは、町で食糧など必要な物を買った。パンとリトルの銃弾を買うと、次の町へのルートを決めるため、地図を買う事にした。

「あんたら、旅人かい？」

小太りした雑貨屋の店主が、地図を手にする二人に聞く。

「はい、これからどこへ行こうか決める所なんです」

リトルが答えると、店主は少し考えてから言った。

「ちょっと手紙を届けてほしいんだが……」

少し間をあけて話を続ける。

「隣の町に娘がいて、元気でやってるか気になってしょうがないんだ。だが最近、配達屋が来なくて困ってるんだ」

代わりに行ってきてくれないか？と店主は申し訳なさそうに言った。

「手紙だな、いいぜ！」

サモンがすぐに返事を返す。店主は「ありがとう」と何度も言って、地図を広げて指を指した。

「この洞窟を抜けたら、娘が住んでる町に行ける」

さらに指を動かし、大きな字が書いてある場所を指した。

「近くには都市トールがある。魔法が盛んな場所だから、一度訪れて見るといい」

サモンは「楽しみだな！」と言ってはしゃいでいた。まるで遠足に行く子供のようだ。

「娘さんの名前は？」

「クルミだ。町ではカフェをやっているから、店を探すといい」

店主は紙に自分の名前をサインして、手紙と一緒にリトルへ渡した。彼女はしっかりとそれを受け取ると、折れないようにそっとカバンの中に入れた。そして行き先をメモした地図をもらって、飴が

欲しいと駄々をこねるサモンを引きずりながら店を出た。

洞窟は森を少しだけ戻り、分かれ道を曲がった先にある。そのため彼らは今、森の中を歩いていた。

「ねぇサモン」

リトルが途中で足を止める。サモンは振り返って、彼女の話を聞いた。

「あの紅い竜って、どうやって出してるの？」

魔獣を従えるのは、極一部の人間にしか出来ないことだ。代表的なのはビーストテイマーだろう。だが彼らは常に魔獣と共に生活し、カードやボールにしまうなんて事はしない。またワープなんて魔法は夢の話で、出来たなら世界から拍手喝采ものだ。

「どうやって出してるか？」

サモンは「うーん」と少しだけ考えた後、笑って答えた。

「わかんねぇ！」

「そんなことないでしょ！」

リトルはサモンの左ポケットから紅いカードを無理やり引っ張り出して、彼の真似をしてカードを降り下ろした。しかし何も出てこないどころか、カードから何の魔力も感じなくなって、紅い色も褪(あ)せてしまった。

「だから、わかんないけど」

サモンは彼女からカードを返してもらう。すると不思議な魔力がカードにやどり、色も元に戻る。

「オレが出したいって思うと、使えるようになるんだ」

彼はカードを左ポケットにしまうと、洞窟に向かって歩き出した。リトルは不満そうに後をついていった。

「あれは……」

黒いフードをかぶった赤い目の男が、木陰から二人のようすを見ていた。彼はしばらくしてから、黒いカードを手にその場から姿を消した。

洞窟内は意外と広く、灯りも点々とついていた。二人は地図を片手に奥へ奥へと進んで行く。途中の分かれ道では、リトルが念入りに地図を確認していた。

「わっ」

「いたっ！」

突然、見知らぬ男が急いでいたのか、前もよく見ず走っていたせいで、地図をもっていたリトルに思い切りぶつかった。リトルはしりもちをついて、荷物が足元に散らばる。

「す、すいません！」

男はすぐに荷物を拾い、リトルに手渡した。

「ごめんなさい、急いでまして……」

「いえいえ」

彼女は笑っていたが、足を少しだけ痛めたようだ。男はそれに気づいたのか気づかなかったのか、すいませんともう一度言って逃げるように走っていった。

「大丈夫か？」

「うん、平気だよ」

サモンが心配するが、リトルは痛みを隠して笑顔を返した。するとサモンはリトルから荷物を取り上げ、自分のと一緒に背負った。

「無理すんなよっ」

得意の満面の笑みに、リトルは「ありがと」と笑顔を返す。そして二人は、出口へと歩き出した。

「作戦成功っ、と」

岩影でさっきの男がニヤリと笑う。そして、サモン達とは別の方向へ走り去った。

二人は地図を頼りに、洞窟内を進んで行く。だいぶ歩いたところで、ドームのように広くなっていた場所にたどり着いた。

「少し休もっか」

リトルが言うと、サモンは二人ぶんの荷物をドサッと下ろし、ゴロンとその場に寝転がった。

「まだ出口じゃないのかぁ？」

「あと少しよ」

リトルはパンと水筒を取り出すと、転がっているサモンの前に置く。すると彼はすぐ飛び起きて食事を始めた。

リトルは指先に小さな火を灯し、パンをきつね色にやいて食べた。それをサモンが珍しげに眺める。

「どうしたの？」

リトルがそれに気づいて訪ねる。

「オレ、魔法って使えないんだ」

魔法は大抵、親が子に教えていくものだ。血筋や性格で使える魔法の質が変わってくるので、一番性格が近い父か母に教わる。リトルも小さい頃、母親に教わったのだ。

「しょうがないわね、じゃあ私が教えてあげる！」

彼女は魔法を知らないサモンの事を不思議に思いながらも、両手を広げてサモンに説明した。

「手のひらに意識を集中させて、力を流すの」

するとリトルの手から、小さな炎が燃え上がり、辺りを明るく照らした。サモンはそれを見て「おぉっ」と驚き、同じようにやってみる。

「手のひらに、力を……」

サモンは目をつぶり、意識を集中させて、力を一点に注ぎ込む。

ブッ！と、サモンのお尻から特別臭いおならが、炎のかわりに出

た。
「ちょっとサモン！」
リトルは鼻をつまみながら怒り、サモンと距離をおく。彼はは笑いながら顔を赤くして「ごめん」と謝るが、面白半分にリトルを追いかけた。リトルは逃げようと走りまわり、サモンはそれを追いかける。

少しの間おいかけっこが続いていたが、二人とも疲れてその場に座った。リトルは荷物をまとめ、いつでも出発出来るように準備する。
「いまだっ、かかれ！」
すると突然岩の影から数人の男が現れ、剣やダガーでリトルに襲いかかってきた。サモンはとっさに彼女の前に行き、腰の剣を振り抜き攻撃をはじく。そして荷物とリトルの手を握り、洞窟の奥へ走り抜けた。
「逃げられると思うなよ！」
男達はニヤニヤと笑いながら、二人の後を追いかけてくる。
「何、あいつら！？」
「盗賊かなんかだろ！」
サモンはリトルに道案内をしてもらいながら、洞窟の中を全力疾走した。右へ左へ、曲がりくねった道を進む。
「そこを曲がったら出口よ！」
リトルが手を引かれながら言った。後ろから盗賊達の声が聞こえてくるが、洞窟を出てしまえばすぐ町に逃げられる。
「なっ……！」
しかし、曲がり角をノンストップで進むと、そこには外の明かりではなく、分厚い土の壁が立ち塞がっていた。二人が戻ろうと振り向いた時には、追いかけていた盗賊が道をふさいでいた。
「道がないっ！？」
「どうなってるの？」

リトルは地図を何度も確認したが、やはりここが出口だった。サモンは盗賊を睨み付けて威嚇していると、一人の男と目が合った。
「あんたは！」
盗賊の中に、途中でぶつかってきた男がいたのだ。そいつはゲラゲラとあざけり笑い、二人をばかにして言った。
「ちょいと地図をすり替えたのさぁ」
バカ正直に信じやがった、と男が言うと、盗賊達は一斉に笑う。リトルは頭にきて、腰から銃を抜いた。
「このっ……！」
「おっと、大人しくしてろよ」
しかし一人の盗賊がそれに気づき、魔法を唱えた。すると地面から鉄の鎖が生えてきて、生き物のようにリトルの銃を叩き落とした。さらに鎖は二人の腕と体をぐるぐると縛って、身動きが取れなくなってしまった。
「ここの土は鉄分が多くてな、鉄の魔法使いとしては居心地がいいんだ」
「さすが、頭（かしら）の鉄魔法は最強っすね！」
別の盗賊が魔法使いをおだてた。どうやら鉄魔法の男がリーダーらしい。
さらに盗賊の頭はリトルの鎖を伸ばし、鎖の端を持つと近くにたぐりり寄せる。
「何するのよ！」
リトルが離れようともがいたが、鎖はびくともしない。盗賊はニタニタしながら彼女の首もとにダガーの刃を当てる。
「リトル！」
「おっと、動くなよ」
鎖が器用に動き、サモンを殴りつける。そして二人の荷物を盗賊達の足元に投げ飛ばした。
「やっほぉい！」
盗賊の手下達は荷物に飛び付き中をあさった。だが出てくる物は

食品ばかり、金目の物など入っているはずがなかった。
「頭、これが最後です」
したっぱの盗賊が、雑貨屋の店主から預かった手紙を出した。だが頭は中を開けるまでもなく、ビリビリと手紙を破り捨てる。
「ち、今回はハズレか」
そう言って、ちぎれた手紙の欠片を踏みにじった。
「前に捕まえた配達屋も手紙しかもってなかったが、くだらねぇ！」
あの町に配達屋が来なかったのは、盗賊達が襲っていたからだった。頭は土で汚れた手紙を見下し、唾を吐き捨てた。
「おい」
サモンがボソリと言う。頭が彼を睨み付けると、逆に睨み返した。
「おっちゃんの思いに、何やってんだ」
「何言ってやがる」
頭がサモンに近づこうとした時、サモンを縛った鎖が、だんだん赤くなっていることに気づいた。そしてついにはドロリと溶け落ち、地面の上で冷え固まった。
「て、鉄を溶かしやがった」
盗賊達は驚き、しりごみした。サモンは身体から湯気を出しながら、両手を前に出し、手のひらを盗賊に向けて目を閉じる。
「手のひらに、意識を、集中させて……」
リトルはとっさに頭の腕に噛みついた。目の前の少年に気を取られていた頭は怯み、リトルを離してしまう。彼女は散らばっている荷物を岩の陰へ蹴り飛ばし、自分もそこへ逃げた。
頭は小娘より先にガキを始末しないとと思い、おどおどする手下達に舌打ちしながら両手をサモンに向けた。
「もう一度縛られてろ！」
頭が魔法を使い、無数の鎖を地面から出した。それはサモンの足や両手を縛り、動きを封じようと巻き付く。だが、少年に触れたとたんに、熱で溶けて地面に落ちていった。
「な、なんだこいつっ！」

手下の盗賊達は次々と逃げ出し、視界から消えていった。頭はしつこく鉄魔法を使っていたが、彼を止めることは出来ない。
「集中、集中、集中……！」
サモンは今まで閉じていた目を開く。すると両手からは大きな火炎弾が、盗賊に向かって発射された。
「ぐわあああぁぁっ！」
一瞬で頭は黒焦げになり、火炎弾は壁を突き抜けていく。その先にいた逃げ惑う盗賊達は巻き込まれ、炎に包まれる。
サモンは火炎弾を撃った反動でその場に倒れ、リトルを縛っていた鎖は術者が気絶したせいで、魔法が解けぼろぼろと崩れ落ちた。
「サモン！」
彼女は倒れたサモンにかけよると、ゆっくりと体を起こした。
「腹、減った」
「……町についたらね」
サモンは立ち上がると、リトルと一緒にまっすぐな洞窟を歩いた。道の先には、橙色の夕陽が差し込んでいた。

「次の町まだかー」
サモンがだらけて言う。その言葉に隣の少女はハッと気づいて言った。
「そうだ、手紙は！？」
店主に頼まれた手紙は、サモンの魔法で灰になっていた……。

## 騎士と正義と青年と

二人が洞窟の出口にたどり着いた時、逆に洞窟に入ろうとしている一団と会った。全員で十数人いる彼らは、同じ銀の甲冑を身に付け、黄色の紋章が描かれた盾を装備している。兜のせいで表情は見えないが、ピリピリした空気を漂わせていた。

「そこの者、止まれ！」

先頭の、他の兵士より位の高そうな装備をした騎士が、太い声で叫び剣を抜いた。サモンは腰の剣を抜こうとしたが、リトルが「待って」と彼を止める。

「貴様ら、盗賊の仲間か？」

答えろ！と騎士は怒鳴った。後ろの部下である兵士達も剣に手を当て、いつでも戦闘が出来るようにしている。

「私達は盗賊じゃありません。盗賊なら奥で寝てます！」

リトルが断言した。だが騎士はその言葉を信用していないらしく、手合い図で部下二人を洞窟へ送りこんだ。

「隊長！」

しばらくして、部下が急いで帰ってきた。騎士は報告を聞いて驚いた。

「盗賊が、壊滅しただと？」

数秒間黙っていた騎士は、くるりと振り向き、部下全員に早口で告げる。

「第一部隊と第二部隊は現地で残党の逮捕及び連行、第三部隊は伝令として国王に報告、かかれ！」

騎士の号令で他の兵士達は一斉に動き出した。そして、その場にはサモンとリトル、騎士の三人が残った。騎士は剣をしまい、兜を外す。

「申し訳ない」

黒髪に口髭をはやした男前の騎士は、頭を深々と下げて謝った。
「私はトール国の騎士・ジンと申す。盗賊逮捕の命を受け、この地へやって来たのだが……」
そこまで言ったところで、リトルが話を遮った。
「顔を上げて下さい。私達、何もされてないですから。それに戦地なら人を疑うのは基本的なことですし」
彼女の言葉に心を救われたジンは、もう一度頭を下げて言った。
「お詫びに町まで送らせて送らせてもらいたい」

ジンは近くまで自分たちが乗って来た馬車に案内し、二人を町まで連れていった。戦闘用なだけあって屋根もなく椅子も固かったが、馬の速さは貴族用のそれとは別格だった。サモンがふざけて落ちそうになりつつも、徒歩の数倍早く町へついた。
すっかり日も暮れ、すでに月が顔を出していた。ジンは馬を入り口に止めて二人を下ろす。
「国王に報告が終わったらまた来よう。その時は食事かなにかさせてくれ」
「送ってくれてありがとな、おっちゃん！」
サモンがお礼を言う。ジンは少し笑って「それでは」と挨拶すると、馬車を走らせ闇に消えていった。残された二人は、空腹を満たそうと近くの飲食店に入った。
「いらっしゃいませーっ」
店には数人の客とバーテン、そしてエプロン姿で接客をする女の子がいる。見た目はサモンと変わらないほど幼く、１５歳位だろう……。二人はカウンターに座ると、とりあえずご飯とおかずを注文した。料理が並ぶと、サモンは勢いよく食べ始める。リトルは少ししてから、接客していた女の子を呼んだ。
「この町に、クルミって子がいると思うんですけど」
リトルが訪ねると、女の子はニコッと笑った。
「私がクルミです、お客さん」

店を少し抜けて、リトルとクルミは裏口の近くで話をした。雑貨屋の店主から手紙を渡された事、洞窟で盗賊に襲われた事、サモンが手紙を燃やしてしまった事を、順番に話した。
「ごめんなさい、手紙を届けられなくて」
「いいですよっ、いつも同じ内容なんですから」
クルミは終始クスクスと笑いながら、リトルの話を聞いていた。一欠片も怒る様子は見られない。リトルは内心ホッと気をゆるめ、気になっていた事を聞いた。
「お父さんとはどうして離れて暮らしているの？」
すると、クルミは突然顔を赤らめてうつ向く。リトルはニヤリと笑うと、肘でツンツンと彼女をつついた。
「好きな人、追いかけてきちゃったとかー？」
クルミは小さくうなずく。リトルはさらに「名前は？」「どんな人？」と質問攻めにしたのだが、彼女が答える直前に、店からバーテンが慌てて出てきた。
「お客さん、連れの方が大変だ！」
「サモンが？」

……リトル達が裏口へ出た後。サモンは一人勢いよく食事をしていた。
「よく食べるねぇ」
バーテンが感心するが、全く反応せず食べ続ける。すると隣に、襟つきの服を着た細身の青年が座った。白い服の上に黒い服を羽織りズボンも髪も黒一色なので、全体的に暗い印章を受けた。サモンは青年が首から下げている袋が気になったが、無視して食事を続ける。
「マスター、いつもの」
青年の注文に、はいよとバーテンは支度をした。飲み物が置かれるまで彼はサモンを卑しいといった目で見ていたが、サモンはそれ

でも気にせず食べ続けていた。
　しかし、サモンが水を飲んだ時勢いがよすぎたのか、隣の青年に少しかかってしまった。すると青年はカウンターを叩きながら立ち上がり、サモンを睨み付ける。サモンは驚いて手を止めたが、自分が何をしたのか分かってはいない。
「君、まわりに気を使って食事しないか。ここは自宅じゃないんだぞ！」
　サモンは逆に怒り、青年に叫んだ。
「ばはまらぅ、ぷいかはたんでびゆぅまろ！」
　しかし、口の中に食べ物が入っていたせいで言葉にならず、さらに食べ物が青年に襲いかかる。
「……っ！」
　青年は我慢ならないといった感じで、声を荒げて言った。
「外へ出ろ、決闘だ！」
　サモンも「おぅ！」とうなずいた。ちょうどリトル達が入って来たが、男達は無視して外に出ていった。

「どちらかが降参するまでやるからな」
「あぁ、わかった」
　二人は月夜の下、数メートル離れて立つ。周りにはやじうまがぞろぞろやって来て、自然と戦いのリングができていた。リトルは飛び出してケンカを止めたかったが、すぐに試合が始まってしまった。
「いくぞ！」
　サモンは腰の剣を抜き、勢いをつけて飛びかかる。青年は避ける様子も無く寸前まで剣を惹き付けると、両手のひらで剣の刃を挟み込んだ。
「甘いんだよっ！」
　俗にいう白刃取りだ。両者は見合ったまま動かず、いや動けずに、じりじりと力比べをしていた。意外にも青年の力が強くて、サモンは留めておくので精一杯だ。

「どうした、腰のカードは使わないのか！？」
サモンは咄嗟に左ポケットを見た。トランスの前ではカードは出していないし、話しもしていない。そのすきを逃さなかった青年は、剣から手を離すと同時にサモンの顔面にひじうちを食わせる。彼は一瞬ひるみ、後ろに数歩よろめいた。
「なんで、カードの事わかったんだ！？」
しかしサモンは顔の痛みなど無かったかのように立ち、青年に向かって言った。
「そんなこと、簡単だろ……っ」
青年はそう言うと、自分の胸を服の上から押さえ、倒れるように座り込んだ。サモンも青年の様子がどこかおかしい事に気づき、構えを解く。
「トランス君！」
クルミが青年、トランスの元に駆け寄る。彼はすでに息が上がり、ヒューヒューと変な呼吸音が聞こえてくる。
「邪魔、するな……」
トランスは差しのべた手を払いのけようとしたが、体が動かない。クルミは向きを変え、驚いているサモンに言った。
「トランス君は病気なの、お願いだからこれ以上戦いを続けないで」
サモンはしばらくして、剣を鞘に収めた。トランスは睨み付けていたが、彼はいつものごとく笑って言った。
「メシ食って元気になったら、決着つけようぜ」
そしてサモンは、店に戻っていった。

## 仲間と銀と黒の札

次の日、朝からサモン達はクルミの店で手伝いをしていた。昨日のケンカで店の邪魔をしたお詫びと、宿を探そうとした二人を泊めてくれたお礼だ。リトルはクルミと一緒に、カフェの制服を着て接客をしている。

「マスター、可愛い子が入ったじゃないか」

「今日だけのバイトさんだけど、仕事も出来るし惜しい人材だなぁ」

リトルはベテランのクルミに劣らない働きっぷりを見せていた。実際には二人必要なほど忙しくはないのだが、女の子が一人増えるだけで、店の雰囲気がずっと良くなっていた。

「じゃあコーヒーと卵サンドで」

「かしこまりました！」

「お嬢ちゃんこっちも」

「はいっ！」

リトルが店で活躍している頃、サモンは店の裏で薪割りをしていた。重たい斧を振り上げ、切り株の上に置いた丸太に降り下ろす。単調で疲れる仕事に、彼は嫌気が差していた。しかし他にできる事は皿洗いくらいだが、それをしても割れた皿がふえるだけでなんの意味もない。

「よぅ」

退屈で死にそうなところに、黒い襟つきの服を着た青年……トランスがやって来た。サモンは斧を振る手を止めて、額の汗をタオルで拭きながら彼を見た。首からは昨日と同じく袋を下げている。サモンはそれも気になっていたが、ケンカの決着もつけたいと思っていた。

「昨日の続きか？」

サモンは斧を投げ出し、外していた剣を拾い上げた。決闘のほう

が薪割りよりずっと楽しいと思ったからだ。しかしトランスは構える様子もなく、近くの薪に腰掛ける。
「話がしたい」
がっかりするサモンをよそに、トランスはおもむろに首にかけた袋から中身を取りだし、サモンに見せた。中身は長方形の札で、銀色に輝いた縁の中に銀の鎧兜を身につけた騎士が描かれている。サモンは驚いた。それは紅い竜と同じ、召喚師のカードだった。
「サモンって言ったな、お前もカードを持ってるんだろ？」
トランスの言葉にサモンは左ポケットを見た。そう言えば昨日も何故、カードの事がわかったのだろうか。
「なんでわかったんだ？」
サモンは不思議に思い、トランスに聞いた。すると彼は呆れてため息をついたあと、カードをくるくると回して答える。
「異常な魔力がカードから溢れているのに気づかないのか。この袋みたいに防魔の術式をかけておかないと、誰だって気づくだろ」
トランスの首に下げられている袋は、パッと見た感じではなんの変哲もないただの袋だ。しかし裏側には無数の術式と魔法印が刻み込まれている。
トランスは一通り説明を終わるとサモンの目を見て、不安と期待を込めて言った。
「お前、召喚術を使うのか？」
「もちろん！」
それはサモンにとって当たり前の事だったので、胸を張って答えた。そして紅いカードをポケットから取りだし、炎の竜を解き放つ。
「ディノ！」
出てきた竜は翼を小さく折り畳み、体を丸めて休んでいた。召喚された後も周りに殺気が感じられないからか、起きようとはしない。
トランスは恐る恐る紅い竜に近づき、体を撫でた。竜は静かに寝息をたてて嫌がる様子もなかったが、彼は少し触れたあと距離を取った。

「トランスも召喚しようぜ」
サモンは寝ている竜の上に飛び乗り、そこに自分も寝そべって言った。しかしトランスはカードを袋にしまうと、悔しそうな顔をしてサモンに言う。
「僕は、召喚術は使えない」
サモンは体を起こしてトランスを見た。彼はしばらく黙ったままうつ向いて、首から下げた袋を握りしめる。
「召喚師の血は、僕にはほんの少ししか流れていないんだ。一応召喚師の孫なんだけどな」
トランスのおじいさんは純粋な召喚師の魔力を持っていた。しかし結婚し子供の代になるに従って、その魔力は薄れ、消えていったのだ。
「カードから召喚するなんておとぎ話かと思っていたよ」
「お前……」
トランスは確信した。召喚師はいるのだと、自分は召喚できないのだと。いままで彼が抱いていた希望と不安はすっきりなくなり、虚しさだけが残っていた。
「オレもすぐに呼べた訳じゃないんだ」
サモンの声に反応してトランスが顔をあげると、彼は竜の上から空を見ていた。
「ある日突然、空を見てたら聞こえたんだ。『飛ばないか』って」
いつもの笑顔で、彼は言う。
「いつか聞こえるさ、お前にも！」
するとトランスも、空を見上げてみた。声は聞こえなかったが、心はすこし軽くなった。

「ぜぇはぁ、ちっくしょう！」
男は両手を縛られたまま、草むらを走り続ける。

「なぜ逃がした！」
「申し訳ありません」
「追え、すぐ捕まえろっ！」
後ろから数人の男の声が聞こえてくる。その度にもつれる足に鞭打ちながら、近くの町へ急いだ。
「許さねぇぞ、あのガキっ！」
髪の毛がチリチリの男は、歯を食いしばって走り続ける……。

「そろそろお昼にしませんか」
お昼のお客もピークを過ぎ、店内は少し静かになっていた。クルミが手を止めて、テーブルを拭いているリトルに言う。彼女は「はい」と返事を返して、使っていた布巾を洗い場に持っていった時、ふとあることを思いついた。そして、コップを拭いていたバーテンに聞いた。
「ちょっと調理場借りてもいいですか？」
バーテンが「どうぞ」と快く承諾してくれたので、リトルは早速袖をまくって料理を始める。といっても作るのは、包丁も鍋もフライパンも使わない、ただのおにぎりだが。
クルミはその横で昼御飯を作りながら、リトルの手つきに見とれていた。白米が彼女の手によってみるみるうちに形取られていく。
「上手ですね」
「私よく作ってたから」
これしか知らないんだ、とリトルは笑って言った。だがその表情には少し寂しさも混じっていたが。
「お、いいにおいだな！」
「マスター、僕もお昼いいかな」
すると、裏にいた二人も店の中へと入って来る。昨日と違って仲が良さそうだったので、リトルとクルミは少し安心した。

「はい、どうぞ！」
クルミはできた料理をカウンターに並べると、サモンは早速食べ始めた。トランスは昨日と変わらないサモンを見てぶつぶつ呟いた後、自分も一つ席を開けて座る。
「旨いなこれっ！」
「食べてる時は喋るなよ」
トランスはサモンを注意するが、昨日のように敵意をむき出しにはしない。サモンもそれがわかっているのか、度が過ぎない程度にはしゃいでいた。
「はい、おにぎり！」
リトルはカウンターに、自作のおにぎりを山盛りにした皿を置いた。サモンは早速手にとって口へ入れる。
「……うまいっ！」
中の具はなく塩味だけのおにぎりを、サモンは何個も食べていった。トランスもつられて一つ食べてみたが、普通のおにぎりだと言いつつ二つ目を手に取る。
「私達も食べよっか！」
食事を先に始めた二人の幸せそうな顔をみて、リトルとクルミも隣に座って料理を食べる。その間、四人に笑いが耐える事はなかった。

「っだらっしゃぁ！！」
突然後ろから、がらがら声で叫びながら男が乱入してきた。後ろ手に手錠をかけられ、髪の毛はチリチリ、さらに肌はあちこち火傷の跡がある。
男は店内を睨み付け、カウンターに座っている四人とその奥にいたバーテンを確認した。彼らは後ろを振り向いて敵と認識していたが、食事中だったので武器は手元になく無防備な状態だった。
「ガキ……あん時は世話になったなぁ！」
「まさか、盗賊の頭？」

目の前にいた男は、洞窟でサモン達が襲われ、逆に返り討ちにした盗賊の頭だった。盗賊はあの時のように鉄の魔法を使い、床を突き破って出てきた鎖を操った。五人は身体と手を鎖に縛られ、足は床や壁からのびた鎖に繋ぐ。その場にいたサモン達は、完全に身動きが取れない。

「てめぇら、なぶり殺しにしてやるぅ！」

盗賊は体を反らしながら、復讐に歓喜して叫んだ。リトル目の前に立つおぞましい気を感じ目をそむけて、あの時の魔法を思い出す。

「サモン、あの火炎魔法使える！？」

おう、と彼は返事を返したが、いくら集中してもからだから炎が出るどころか、熱くもならない。

「全く、魔法はもっと効率的に使用するものだぞ」

トランスはウンウン唸っているサモンを横目に、魔力を身体中に集める。すると体を縛っていた鎖があの時のサモンのように、どろどろと溶け落ちた。しかし盗賊も二度目の体験だったので驚く事はなく、高笑いをしてトランスを睨んだ。

「ガキ共がふざけやがって、黙って捕まってりゃ良かったのにな！」

全く盗賊の言う通りだ、とトランスは思った。体は昨日の決闘から全快しておらず、じきに再発して動けなくなるだろう。その上で戦うのはあまりに無謀だった。

だがトランスは許せなかったのだ。盗賊や殺人、横暴を働く貴族など、世界に充満する「悪」を。自分の中の「正義」を掛けて戦いたいと常々思っていた。

「じいさん、力を貸してくれ」

彼は袋の中のカードをイメージしながら、天国のじいさんに語り掛けてみた。もちろん返事は返ってくるはず無く……

「感じろ、トランス！」

ふと頭の中で声が聞こえた。その声ははっきりと覚えているじいさんの声ではなく、若い男の声だった。

「仲間に力を託すのだ、トランス！」

「ま、まさかお前は……」
その答えは返って来なかった。だが、トランスはやることがすでにわかっていた。
両手がふさがっている盗賊は、トランスに鉄の砲弾を作って投げ飛ばした。しかし彼は左手で受けとめ溶かし、右手はサモンを縛る鎖に当てた。しかし、全てを溶かす事はできず、サモンは何とか左手が動く程度にしかならない。
「さっさと済ませろ、よ……」
トランスは胸を押さえ、その場にうずくまる。サモンは左手で握りこぶしを作って彼につき出すようにした。
「ありがとな、トランス！」
サモンの笑みにトランスも苦しみをこらえて笑った。盗賊はトランスがなぜ倒れたのか理解はしていなかったが、へらへらとして嘲り笑った。
「たかが左手のために倒れやがったぜ……ヒハハハ」
「たかが左手か？」
サモンはトランスの活躍で動くようになった左手を、ポケットに突っ込んでカードを取り出した。
「片腕だけで何ができるって……！？」
紅い竜が目の前の鉄の魔法使いを睨み付け、吐息は火が漏れだして熱い。鱗は逆立って刺々しく、昼寝をしていた竜とはまるで別の生き物のような形相で、敵の前に立ちふさがる。
「ディノ、いけっ！」
「まさか、こいつは……」
竜の口から漏れだした炎が溢れ、口一杯に広がったそれは、持ち主の掛け声と共に解き放たれる。その火炎は一度味わった痛みを蘇らせ……
「ぐわあぁぁっ！」
再び盗賊の頭は火炎に包まれ、ドアを突き破って外へ吹き飛んだ。

盗賊は捕まりたくないと終始叫びながら、ルーンの兵士に連れていかれた。店は入り口のドアが壊れ、床に穴が空いた程度だった。だが兵士が魔法で修復してくれたので、店を続ける事ができる。そもそも盗賊が逃げたのは、兵士の不注意が原因だったらしいが。

「トランス君、大丈夫？」

事件中ほぼ無傷で見ていたバーテンが兵士との手続きを全てしてくれたお陰で、リトルとクルミはトランスの看病に集中できた。サモンはいても邪魔になるだけだったので、外で待っている。

「……っ」

「気がついた！」

ベッドに寝かされていたトランスは、ゆっくりと体を起こす。

「もう、無茶ばっかりして！」

クルミは泣きそうな顔をして言うと、トランスに抱きついた。慌てるトランスをリトルが茶化すので、彼は顔を赤くしていた。

「起きれたみたいだな！」

サモンがいつもの満面の笑みで部屋に入ってくる。トランスはつられて少し笑うと、ありがとうと小声で言った。

「いらっしゃい」

四人が部屋にいた時、店に一人の男が入ってきた。その男は黒いローブを身に付け、口元しか見えないくらいフードを深く被っていた。バーテンは変なお客さんだなと思いつつも、カウンター席に座った男に水を出す。

「コーヒーを一杯」

男はかなり低い声で言った。まるで変声機でも使っているかのよ

うだ。
「少しお待ちを」
バーテンは豆を機械の中に入れ、しばらくしてできたコーヒーを出す。男はカップを手に取りゆっくりと口に含む。
「……マスター、美味しかった。ありがとう」
男はお金をカウンターの上に置くと、コーヒーを持ったまま立ち上がる。すると徐々に姿が薄くなっていき、わずか数秒で姿を消した。バーテンは狐につままれたような出来事に、しばらくの間なにも考えられなかった。

「どこへ行ってたんだい？」
黒いローブを着た男は、草原のまん中にいた。目の前には同じくローブを着た、男より少し身長の低い青年がいる。
「コーヒーを飲みに」
男は手に持ったカップに、もう一度口をつける。青年は黙って黒いカードを取り出すと男に向けた。すると男はカードの中に入ってしまい、手に持っていたカップはその場に落ちてガシャンと割れた。
「次にいくよ、デーモン」
青年が呟くと、頭の中でさっきの男の声が響く。
「わかりました、コール様」
彼はカードをしまい、草原を歩き出した。都市トールへ向かって……。

続く

## 竜と学者と急降下

あれから一週間ほど経ち、サモン達は別れを惜しみながらも都市トールへ向かう事にした。店の裏から出ていく二人を、クルミが見送ってくれる。

「リトルさん、またお店に来てくださいね！」

「もちろん！　その時はもっといろんな料理、教えてね」

ほんの数日で意気投合した彼女達は、両手で握手を交わした。昨日も夜遅くまでいろいろ話をしていたみたいだ。おにぎりと卵焼きしか作れなかった彼女も、クルミの指導でレパートリーが増えたらしい。

しかしサモンはこの一週間薪割りや荷物運びをさせられて、遊び相手もいなかったので退屈で仕方なかった。その上トランスは病状がなかなか回復しなかったので喧嘩の決着もつけれず仕舞いだ。

「サモンさんも、また来てくださいね」

「勿論！」

サモンはそう言うと、二階の、トランスが寝ている部屋の窓を見た。窓は閉められていて、カーテンもかかっている。

「絶対、決着つけに来るからな！」

サモンは窓の向こうにいるトランスに叫ぶと、クルミに別れを告げて都市トールへと歩き出した。

「……またな、サモン」

トランスはカーテンの隙間から、小さくなっていく二人を見た。胸の袋に手を当てて、再会を誓いながら……。

両脇に林が広がる道を、二人はトールへと歩いていた。ここはよく商人が利用する道で、靴や車輪で踏み固められていてとても歩きやすかった。

リトルは辺りの景色を見ながら、サモンの事をぼんやりと考えていた。一人で旅をしていたり、魔法を知らなかったり、不思議な竜のカードを持っていたり……。

「そうだサモン、竜に乗っかってトールまで行けないの？」

なんで今まで気づかなかったのだろうとリトルは思いつつ、サモンに聞いてみた。彼は頭を掻きながらカードを取り出したが、あまりいい顔をしてはいない。

「んじゃ、飛んでみるか」

振り下ろされたカードから、紅い竜が姿を見せる。それはなんだか眠たそうにあくびをしていたが、翼をゆっくりと動かすと離陸の体勢に入った。

「よし、行くぜっ」

「やったぁ！」

二人が背中に飛び乗ると、竜は大きく羽ばたいて地面から離れていき、みるみるうちに大空を進んでいった。

「ヤッホー、快適快適っ」

リトルが下を見ると、既にさっきの位置から大分進んでいる事に驚いた。しかし見える都市の姿はまだ小さく、しばらく飛んでいないとたどり着かない距離だった。

「リトル、ごめん……」

「え、何？」

景色に気をとられていたリトルは、サモンの言葉の意味がわからなかった。しかしすぐに異変は訪れた。

「グオォォ……」

紅い竜が低く唸ると、体がホタルのような無数の光になって四散

したのだ。当然乗っていた二人は支えを失い重力に引き寄せられる。
「待ってええええ！！！」
さっきまで見ていた景色が、瞬きする度に近づいてくる。それも急速に。
「サモン、何でこうなったの！？」
「腹減ったぁ……」
「答えになってないよぉぉぉぉ！！！」
リトルは叫びながら林の中へ落ちていった。

「痛っ……」
無数の鳥達が鳴き声を上げて飛び回っていた。二人は木の枝に引っ掛かって、なんとか大怪我をせずにすんだようだ。
「サモン、大丈夫？」
「なんとかな」
上空から奇跡的に降りたリトル達だったが、いまどこにいるのか、さっぱりわからなくなってしまった。
「サモン、なんで竜を消したの？」
リトルは荷物から救急箱を取り出して、サモンのかすり傷を治しながら聞いた。
「オレもわかんない……。けど、急に腹が減ってきて」
するとほんの少し前に朝ごはんを――しかもお茶碗三杯も――食べたはずのサモンのお腹が、大きく音を立てた。
「えぇっ？　仕方ないなぁ」
リトルはカバンからおにぎりを出してサモンに渡した。彼はすぐに腹ごしらえに入る。
木が間伐されていて日差しが適度に入ってきたので、道に迷ってしまった不安はあまり感じなかった。まだ太陽は昇りきっていないし、元通り歩いて向かうのがいいだろう。

リトルは地図とコンパスを手にぐるりと周りを見た。すると、近くに小屋があるではないか。しかも煙突から白い煙が出ている。
「サモン、あの家で道を聞こう！」
二人は小屋に近づいていった。しかしよく見るとその小屋には窓がなく、レンガの壁は所々黒く焦げ付き、入り口だろう扉は分厚い鉄で作られているという、なんとも不思議な小屋だった。
「す、すみませーん、どなたかいませんかー？」
リトルが鉄の扉を叩くが、返事はない。
「誰もいないんじゃないか？」
「そんなはずないわよ。だって煙突から煙が……」
二人が煙突を見上げると、紫色をした煙がもくもくと吹き出していた。煙が出ているという事は、人がいるという証拠だ。
「君たち、逃げて！」
不意に後ろから声がする。と同時に小屋の屋根が爆音と共に、マンガのように空高く吹き飛んだ。

あまりの光景に、二人は無言で立ち尽くすしかなかった。

「驚かせてしまってすまないな」
白衣を着た長髪の女性は二人に少し頭を下げた。そして長身で細身の彼女は、二人を屋根のない小屋に案内した。案の定あたりには分厚い本や魔法道具などが、爆風で散乱していて足の踏み場もない状態だった。
「私の名前はマーノ、物理魔法学調査研究会の会長をしている」
「……なんだかわかんないけど、偉いさんか！」
サモンは難しい単語に考えるのを止めたみたいだ。
「私はリトル、こっちはサモンです」
マーノはリトルと握手をすると、散らかった部屋の片付けに入っ

た。といっても指先を少し動かしているだけで、物が宙にういて、指定の位置に戻っていく。
「すごい……」
リトルは彼女の魔法に見とれていた。それもそのはず、彼女が使っている魔法は子供にもできる魔法だが、同時に数十もの物質を正確に移動させるのは至難の技だからだ。ちなみにリトルも使えるが、同時に動かせるのは二三個が限度だ。
「お待たせ」
マーノはキレイになった部屋を見てうなずいた後、改めて二人を中に案内した。

部屋の壁には本棚やガラス棚が並んでいて、その中にところ狭しと資料や道具が置いてあった。ここが小屋ではなく倉庫だと思えば窓がない理由も納得がつく。
真ん中にあるテーブルに、リトルとマーノが対面して座っていた。サモンは珍しい道具や素材を見て回っている。リトルはトールへ行く途中、竜から落ちた事をマーノに説明した。
「そうか、それで迷子というわけか」
マーノはがを出して笑っていたので、リトルは恥ずかしくて顔を赤く染めた。
「笑い事じゃないです！　死んじゃうかと思ったんですから」
「いやぁすまない」
そう言った彼女だったが笑いは止まらないみたいだ。よほどツボにはまったらしい。
「……で、トールへはどっちへ行ったらいいですか！？」
マーノがあんまり笑うものだから、リトルは少し怒り口調で聞いた。
「あぁ、ここから南へ少し行けば、元の道に戻れるが……」

ぐいと体を前に出して、マーノが目を輝かせて言った。
「紅い竜とやらは本当にカードから出るのか！？　だとしたらすごい事ではないか！　今まで人類はワープや転送と言った行動に縛られていたが、ついにその呪縛からも解放されるのか！！」
因みにマーノが言った通り、この世界には魔法はあれど転送やワープと言った物理的法則を越える物はない。火を起こすのは酸素と魔力を燃やし、水を作るのは空気中の水素と酸素を結び付けるのだ。
「サモン君お願いだ、一度見せてくれ！」
一人熱が入っているマーノは、サモンの手を取って懇願した。しかしサモンは相変わらずの表情だ。
「今日は疲れたから、いやだ」
「そう言わずに！」
マーノは次第に強く言っていたが、サモンも折れる気配はない。何度も断られた末に彼女が「カードだけでも調べたい」と言い出したので、仕方なく紅いカードを渡した。

それから数分後、あっという間にマーノは研究を終え、サモンにカードを返した。
「どうでしたか？」
「うむ、データは粗方もらったよ。それにしても不思議なカードだな。……生きてるみたいに魔力が鼓動しているんだ」
「生きてるんですか！？」
驚くリトルに彼女は首を振って、テーブルの上にある資料を手に取る。そこにはぎっしりと文字が走り書きされていた。
「無機物が生命をもつ……そんな事あるはず無いよ」
資料をテーブルに戻すと、マーノは都市への道を詳しく書いた地図を差し出した。
「リトル、早く行こうぜ！」
サモンがせかしてきたので、リトルはそれを受け取ると急いで小屋を出た。

「それじゃマーノさん、さよなら！」
改めて二人は、都市トールへと向かって歩き出した。

外に出て見送りをしたマーノは、二人が見えなくなるまで眺めていた。
「不思議な魔法だな、あれもエンシェント・スキルなのか……」
彼女は一人呟いて、屋根のない小屋に戻っていった。

続く

## 都市と不良と兄弟探し

サモン達の目の前に広がるのは、舗装された大きな道。その両脇にはレンガ造りの店の列が並び、人々が賑やかに行き交う。そしてずっと奥……ちょうど街の真ん中に位置する場所にはひときわ立派な塔が、天を突くようにそびえ立っている。

「すごい……」

「ここが都市トールか！」

辺りの賑やかさにサモンは感動していた。どこを向いても魔法が使われ、楽しく暮らす人々で溢れている。その光景にリトルも当然感動していた。

「よう、旅の人だね。この街は初めてだろう？」

そう話かけてきたのはカラフルな服を着た道化の青年だった。といっても同じような見た目の人は辺りに何人もいたので場違いとは思わなかったが。道化は指を鳴らして水の玉を作り出すと、それをシャボン玉に変えて見せる。

「サービスだよ、受け取って」

シャボン玉に紐をつけて風船のようにすると、リトルにウインクしながら手渡した。リトルは元々道化の顔立ちもよかったからか、嫌な気はせず彼に好感を持てた。

「この街はもう国って言っていいほど広いからね、飲食店や遊園地、服屋に宝石、なんでもあるよ！」

「飯屋か！？」

サモンが目を輝かせて反応したので、道化はニコニコ笑って続けた。

「じゃあ特別に街を案内してあげるよ！　どんなところに行きたい？」

当然サモンは飯屋と叫んでいた。リトルはどこが良いかと少しの間悩んでいた。二人共少しも疑うことはなかった。

「少しいいかな」
「なんだよ……！？」
道化の後ろから甲冑に身を包んだ騎士が話しかけてきた。振り向いた道化は一瞬にして青ざめた顔になり、その場から一目散に逃げ出した。騎士は人混みに紛れて逃げていく道化に対して何もせず、ただ見守っているだけだが、すぐに別の兵士が数人で取り囲み、あっという間に道化は後ろ手に縛られてしまった。

いきなりの出来事に、二人は驚きを隠せない。

「……遅かったじゃないか」
道化に話しかけた騎士が兜を外すと、下から口髭を生やした男前の顔が見えた。そう、彼は少し前に洞窟から町まで送ってもらった都市トールの騎士、ジンだった。
「ジンのおっちゃん！」
「よく来た、サモン君、リトル君！」
ジンはサモンの頭を撫でていた。ジンが大人びて、サモンは子供じみて見えるので、はたから見るとまるで二人は親子のようだ。
「でもなんであの人を捕まえたんですか？」
リトルが不思議に思って尋ねたので、ジンが困った顔をして答えを返す。
「彼は過去に何度も、旅人を案内するふりをして誘拐や窃盗をしていたのさ」
「誘拐！？」
「そう。あの流れで仲間のいる場所に誘い込むと、大人数で取り囲んで捕まえる手法だ。盗めるものを盗んだらその後は奴隷として売られる……なんとも非道な奴らだ。」
リトルは道化についていった事を考えるとゾッとした。その心境が表情に出ていたので、ジンがフォローとして付け加える。

「あれはこの街のほんの一面……もっといい部分もたくさんあるのがトールだ」
「美味い飯屋はあるのか！」
さっきからずっと同じ調子のサモンに笑い返すと、ジンは兜を抱えて言った。
「ではこの前にした約束通り、昼御飯をご馳走しよう！」

ジンは部下の兵士に兜を渡して、しばらく別行動をとる旨を伝えた。兵士は敬礼の後に捕まえた道化を連れて行った。
ジンはリトル達と大通りから少し離れた場所にある、赤い屋根の店に連れてきた。看板には「炎の雑貨屋」と書かれている。
「なぁ、飯屋じゃないのか？」
「大丈夫、知り合いの店だ」
ジンが店の中に入ると、ドアについたベルが小さく鳴った。続けてサモンとリトルが入った。店内は少し薄暗く、見たこともない小さな道具が所狭しと並んでいる。だがどこにも人の気配はしなかった。
「ゲンショウ、いないのか？」
「……あいよっ」
すると奥の部屋に続く扉が開き、金髪のリーゼント男が入ってきた。
「お、ジンの兄貴！　久しぶりじゃあないっすか！！」
「おい、三日前に来たはずだが」
リーゼント男は「そうだっけ？」ととぼけていたが、本当に忘れたわけではない。そして男はサモンに近づくと、ガンを飛ばしながらじっと目を見て言った。
「俺はゲンショウ、よろしくな」
サモンは怖い顔に一つも気圧されることなく「よろしく！」といつもの笑顔で返す。するとゲンショウはニカッと笑い、オレンジの頭をポンポンと叩いた。

ジンはゲンショウに手合図で何かを伝えると、彼はうなずいて奥の部屋に入った。
「さ、君たちも中に」
ジンが二人を連れて中に入っていった。

「そこに座って待ってろ、すぐに作ってやるからな！」
奥の部屋は畳が八畳敷いてあり、真ん中に大きめのちゃぶ台があった。そして隣の部屋が台所でさっきのリーゼント男がエプロンをして立っている。
「ゲンショウはあんな髪型をしているが、料理が得意でな。そこらの店より美味いんだ」
「おだてすぎっすよ兄貴！」
テンポのいい包丁の音をたてながらゲンショウが返事を返した。
「ねぇ、なんで兄貴って呼んでるんですか？」
リトルが慣れない畳に違和感を感じながらも、気になる事を聞いてみた。
「それはだな、三年前、俺はこの街の暴走族の頭はってたんだ。その頃は騎士との衝突もよくあってな、ジンの兄貴とはその時初めて知り合ったんだ」
ゲンショウがフライパンに材料を放り込みながら話を続けた。
「始めはうざい奴と思ってたんだがな、ある日俺と親友が事故って死にかけた時、一番に助けてくれたのが兄貴だったのさ。それから兄貴には色々世話になって、俺は族をやめることができたのさ」
「ふーん」
サモンがあっけない返事をしたものだから、台所から殺気と共にナイフが飛んできて、サモンの頭を掠めて壁に突き刺さった。
「……」
「……すまねぇ、つい昔の癖が」

するとジンが鬼の形相でずかずかと台所に入り、ゲンショウの襟首をつかむ。
「あれほどキツいお仕置きをしたのにまだその癖が出るのかっ！」
「すすす、すいません兄貴！　ほんとすいませんんん！！」
「この前もその癖で客を追い返したそうじゃないかぁ……」
「ギャアアアアッ！！」
ジンはゲンショウのこめかみに拳骨を、中指を少し尖らせて押し込んでいた。壮絶なお仕置きにゲンショウはらしくない悲鳴を上げ、リトルは思わず目を反らす。サモンは青ざめた顔でナイフとゲンショウを交互に見る、そしてジンを。

この人達を怒らせてはいけない。二人は本能的にそう思った。

「さあ、できたぜ」
ちゃぶ台に水と白米、それに赤々とした料理が四人分ならべられた。
「俺様特製、炎のエビチリだ。沢山食ってけよ！」
「いただきまーすっ！！」
サモンが早速料理を食べた。一口、二口と食べていると、怪獣のように口から勢いよく火を吹き出し始めた。
「あちいぃっ、けどうまいぃっ！」
「だろ！？　嬢ちゃんのは辛さ控えめにしてあるから、安心して食べな！」
リトルのエビチリは確かにピリッと辛い位だった。しかし甘さと辛さの絶妙なバランスが、味わい深いものにしていた。
「美味しいっ！」
「さすがゲンショウのエビチリ。この辛さが病みつきになるんだよな！」

いつもの顔つきに戻ったジンも、エビチリを火を吹きながら食べている。ゲンショウは満足そうな三人を見てニカッと笑い、自分の分を食べ始めた。
「そういやぁ、お前らはなんで旅してるんだ？」
「兄貴を探してるんだ！」
サモンがご飯をリスのように頬張りながら答えた。よく普通に喋れるなとジンが感心する。
「へぇ、人探しか。嬢ちゃんは？」
「私も人探しなんです」
するとゲンショウは少し考えた後、チラシの裏紙とペンを取りだし二人の前に置いた。きょとんとしている二人に彼が言う。
「特徴書きな。この街にいるんなら、俺が見つけて連れて来てやる！」
「本当か！？　でもなんで急に……」
「理由なんて要らねぇよ。ほら、食い終わったらでいいから書けよ」
「ありがとう、ゲンショウさん！」
感謝されて多少のぼせているゲンショウに、横からジンが茶化して入る。
「らしくないな、いつからそんな親切になったんだ？」
「あ、兄貴！　ユーフォーが！！」
ゲンショウは照れてしらばっくれると、エビチリの続きを食べ始めた。ジンもニコニコしながら続きを食べる。途中何度も火を吹きながら、四人は楽しく昼御飯を食べていた。

「それじゃ、何かわかったら連絡するぜ」
ゲンショウは特徴の書かれた裏紙をサモン達から受けとる。
「でも一人で探すのか？」
「いいや、元裏街の仲間を使って……」

「裏町？」
そこまで言ったゲンショウは、ふと二人が旅人だった事を思い出す。
「そうそう、この街は三つの地区に別れていてな。一つは俺達の今いる表街、ここはいろんな奴が住む街のメインだな。そして街の中心にある魔法街、ほら、あの高い塔の回りさ」
ゲンショウが指を指すと、窓の向こうに入り口で見た塔が見える。
「んで、最後に裏街。ここはまぁ、不良の溜まり場みたいなところでな、俺もそこの住人だったわけだ」
まぁ魔法街と裏街は普通にゃ入れねーから気にすんな。と付け加え、ゲンショウは腰に手を当てて胸を張った。
「とにかく、俺が頭はってた頃の仲間がいるから、そいつらに聞いてみるってわけだ！」
「人に頼むのに、なんで胸張るんだよ」
サモンが喋った次の瞬間、今度はスプーンが頭を掠めた。勢いがよすぎてスプーンも壁に刺さり、壁に本日二つ目の傷をつけた。
当然二度目のお仕置きも行われた。

「とりあえず、ありがとうございました」
「気にすんな。それより、そんなでかい荷物もって、街をぶらつくのか？」
ゲンショウがサモンの背中を指差して言った。荷物は主に食料品だがサモンの食べる量が半端じゃないので、リュックにはちきれんばかりに詰め込んでいたのだ。
「どうせ宿もないんだろうし、しばらくここにいりゃいいじゃねぇか」
「いいのか、ゲンショウ！？」
驚くサモンの頭を、ゲンショウは笑いながらガシガシと強くなでた。

「じゃあ早速、街巡りしようぜ！」
サモンが荷物を置いて立ち上がる。リトルも街巡りにはわくわくしていた。
「泊まる所まで貸してもらって……」
「だから気にすんな！　とりあえず街巡り、楽しんで来いよな！」
「はいっ！！」
二人は元気よく店を出て大通りへ歩き出した。

「……兄貴」
ゲンショウはジンに言う。
「あのサモンってガキ、凄いっすね」
何が凄いのか理解していないジンに、彼は説明した。
「俺が挨拶したとき眼から『全力で魔力をぶつけてた』のに、あいつはびびる事なく笑顔まで作って見せやがった……あの歳であの力、裏街に行ったらヤバそうだぜ」
しかしジンは少し笑って、何も心配ないと言う。
「確かに洞窟を破壊する魔法といい、凄い力だ。だが裏街への道は兵士がいるし、やすやすと通れる場所ではなかろう」
そう言って、ジンも店を出る。
「では私は勤務にもどる。人探し、頑張れよ」
「おうよ！」
ジンとも別れて早速特徴の書いた裏紙を見たゲンショウは、「よしっ」と気合いを入れて走り出した。

## 都市と出会いと兄の供

サモン達はゲンショウの家に荷物を預け、魔法都市の大通りを散策することにした。

レンガの敷かれた道を大勢の人が行き交い、その両脇を様々な店が並ぶ。そして遠くにそびえ立つ、立派な塔。どれも星屑を振りかけたように、キラキラと輝いて見えた。

「キレイな街……」

リトルが目の前に広がる景色を見て、思わずうっとりとした。この街にいると自分もキレイになったようで、とても気持ちがよかったのだ。

「ねぇ、サモンもそう思うでしょ？」

リトルが横を見たが、さっきまでそこにいたはずのサモンがいない。辺りを見回すと、駄菓子屋の前で目を輝かせている子供がいた。

「ちょっとサモン、せっかくのムードが台無しじゃないの」

「ムードじゃ腹は膨れないぜ」

「もうっ！」

頬を膨らませて怒るリトルは、近くの街灯にもたれてサモンを待つことにした。どうせ気が済むまでお店の前を離れないだろうし、無理やり引っ張っていくほど急いでないからだ。

サモンは駄菓子屋に立ち並ぶお菓子を、五歳の子供のように目を輝かせて覗いていた。狭い空間に並んだ棚にはぎっしりと商品が並び、キラキラと輝いているように見える。

「坊っちゃん、旅人かい？」

サモンがじろじろと品物を眺めているものだから、普段店の中に座っている店主の老人が顔を出してきた。サモンはよぼよぼの老人に、指をブイの字に立てながら言った。

「じいちゃん、この店で一番旨いもの、二つくれないか！」

「ほいなら、これ持って行きなせぇ」
店主の老人は紙袋から砂糖を一握り手にのせると、息をフッと吹きかけた。その息は手の上で炎になり、砂糖をドロリと溶かしてしまう。すごく熱いはずなのに涼しい顔をした老人は、両手を巧みに使って砂糖を引き延ばし膨らませ、細く長く広げた。
もう一度息を吹きかける。すると今度は強めの風になって、細く長く広がった砂糖を一気に膨らませ、何十にも絡まった糸に変化させていった……。
「すげぇ」
サモンの目の前で広げられる魔法は、砂糖を七色に染めていく。仕上げに割りばしへ膨らんだ砂糖をまとわせると、透明な袋に包んで渡してくれた。
「ほれ、できたぞぉ」
「ありがとうじいちゃん！」
それを受け取ると、サモンはお金を払ってすぐに駆け出していった。

「リトルっ！」
「もう、遅いよ」
近くの街灯にもたれていたリトルはふてくされながらサモンを迎えた。
「店のじいちゃんが魔法でちょちょいと作ってくれたんだぜ！」
さっき買った駄菓子を袋から取りだしたサモン。その手には、割りばしの先に広がる虹色の綿あめがあった。
「じいちゃんが息を吹いたら、それが炎になってさ、両手でこう……」
老人の真似をして手を動かす彼の動きは、伝えようと努力しているのはわかるが、どこか子供じみていて可笑しかった。リトルがクスクス笑うと、今度はサモンが怒る。
「なに笑ってるんだよぉ」

「別にっ！　それより早く食べようよ」
リトルは袋を取って、匂いを嗅いでみた。甘い砂糖の匂いの中に、何故か違った匂いが混じっている。それはイチゴやブドウ、バナナなどのフルーツの匂いだ。さらに一口食べると、ふんわりと広がる甘味に乗って、さっき匂ったフルーツの味が、味わう度に口いっぱいに広がって……とても不思議な味を出していた。一言で言うなれば
「美味しいっ！」
これに尽きるであろう。

「それじゃオレも、いっただきまー……」
ゴツン
「痛っ！」
サモンが大きな口を開けて、綿あめを頬張ろうとした時、道を歩く男の腕が、綿あめを持つ手にぶつかった。男は急いでいたのか結構なスピードで歩いていたので、小柄なサモンはしりもちをついてしまった。
「すみません。大丈夫ですか？」
ぶつかった男は黒いローブを全身にまとい、深く被ったフードが顔を隠していた。しかしサモンが転んだ状態で見上げると、ちょうど男の顔が見える。
――不気味に輝く黄金色の瞳が。

「サモン、大丈夫？」
リトルの気遣いも、頭に入って来なかった。サモンの意識を全て惹き付ける瞳は、幼い頃に別れた兄を思い出させる。
「お前、もしかして」
「急いでいるので、失礼」
サモンの言葉を遮るように男が言うと、間髪入れずに走り去っていった。
「待てよ！」

サモンが男を追いかける。その後ろを、驚きながらリトルがついてきた。
「サモン、あの人知り合いなの！？」
「あぁ……兄ちゃんと一緒に旅に出た奴だ！」
「それってもしかして」
手に持った綿あめを袋に戻しながら、サモンは走った。
「兄ちゃんに、会えるかもしれない！」
兄に会えるという希望を胸に。

男は明るい大通りから横にそれた、薄暗くじめじめした路地に入っていった。その奥、数分走った場所にある空き地で立ち止まると、後ろから追いかける少年を迎える。
「やっと、追い付いたっ……」
数秒遅れてサモンが現れた。肩を大きく動かしながら、手を膝について呼吸する。
「お久しぶりですね、サモン様」
黒いローブの男は、人が出しているとは思えないほど低い声で話しかけてくる。
「ぶつかった時から気づいてたんだろ」
サモンは呼吸を整え、ゆっくりと身体を起こした。ギラリと光る黄金の瞳がそれをみつめる。
「……デーモン」
男、デーモンは名前を呼ばれると、深くかぶったフードをおもむろに取った。青紫の髪が肩まで伸びていて、それは先端に行くにしたがって赤く染っていた。長い髪の間から、不気味な黄金色の瞳がにやついている。
「兄ちゃんはどこだ！？」
サモンは希望にみちた瞳で問いかけた。

しかし……デーモンは夕日髪の少年に、静かに告げた。

「貴方をコール様に会わせる訳には、いかないのですよ」

デーモンが左手を振り上げると、半透明な壁が現れた。それは空き地の四方を瞬く間に囲んでいき、サモンの逃げ場所を無くす。

「気付かなかったのですか。貴方だけがついてこれるよう、私が逃げていたことを！」

その言葉にあわてて後ろを振り向いたサモン。悪い予想が的中した。

「サモン！？」

壁の向こうに、リトルの姿が映っていた。

続く

## 悪魔とサモンと敗北

路地裏を駆け回り黒服の男を追いかけるサモンを、リトルは必死で探していた。
「サモンってば、どこに行ったのよ」
途中までは彼の背中を追って走っていたのだが、落ちていた空き缶を踏んでしまい顔から転んでしまった後、すっかり見失ってしまったのだ。
まだ昼間だというのに、人っ気のないマンションが立ち並ぶ、日陰の多い道は、なんだか暗くて寒い。
「うぅ……早く見つけて、戻ろうっ」
よし、と自分に喝を入れてから十字路を見渡して、とりあえず右側の道を走り出した。もちろんあてがあるはずも無く、リトルの勘一つで決めたことだが、迷っているよりよっぽどいい。
そんなことを考えていると、遠くに見慣れた少年の後ろ姿が見える。
「サモン！　置いてくなんてひどいじゃない、の……？」
リトルはそう叫びながら近づいていったが、距離が縮まるにつれて、その不穏な空気を肌で感じ取った。
半透明の壁を隔てて見えたのは、デーモンの歪んだ笑顔。
「サモン！？」
壁を触れる距離まで近づくと、サモンが気付いて振り返る。
「リトルっ！」
その様子を傍観していたデーモンは、まだ歪んだ笑顔を浮かべている。リトルはそれが不気味で気持ち悪くて仕方なかった。
「サモン、本当にその人、知り合いなの？」
リトルが壁越しに見える男を指差して言った。それに反応した男が、不満げに眉をひそめたて言う。
「失礼な方ですな、私はサモン様のお兄様、コール様の召喚獣です」

リトルは信じられなくてサモンを見たが、彼が否定しないところを見ると、デーモンの言葉は真実らしい。
「五年前のコール様と旅に出る日までは、よく遊び相手に選ばれましたよ」
「あぁ、そうだったな」
サモンが相づちを打ってから、質問する。
「そんなお前が、なんでこんな事するんだ？」
壁を強く叩いたサモンは、男に怒りの視線をぶつけた。
デーモンは青紫の髪をまくし上げて、視界を遮っていた前髪を左手で押さえた。そうすることで、黄金色の瞳がはっきりと見えるようになる。
サモンを試すように、その瞳は輝いていた。
「今度は、私が遊んでもらおうかと思いましてね」
デーモンは今までローブに隠していた右手を露わにした。黒い布から出たそれは人間の形をした左手とは違い、黒い肌に赤く長い爪、長さは左手の倍もある異形な物だった。
「この長さを隠すために、普段は折り畳んだままなんですよ？　こうして伸ばすのは久しぶりになりますね」
語りかけるように独り言を呟きながら、肩を回したり手を広げたり。右腕を動かす度にビクリと怯えるリトルの反応を、デーモンは楽しんでいるみたいだった。
「さてサモン様、そろそろ始めましょう。この状況、何をするかは分かるでしょう？」
目の前に敵、逃げ場はない。サモンは閉じ込められた時、すでにこうなる事はわかっていた。
腰の剣と、ポケットのカードを手に持つ。
「オレが勝ったら、兄ちゃんの居場所を教えてもらうぞ！」
「さて、私に勝てますかな！？」
デーモンは地面を走る、というより滑るような足取りでサモンに急接近すると、その不気味に伸びた右腕を、大きく振りかぶった。

それと同時にサモンは叫び、紅い竜を呼び出す。出てきた竜は異形の腕を、細い両前足で受け止めた。
「ディノス……お兄様から託された紅い竜ですか」
ぼそぼそと呟いたデーモンは、竜の手を振り払い後ろに下がった。
「うあああぁっ！」
竜が頭を低く下げる。同時にサモンが剣を一層強く握り、紅い竜を飛び越えてデーモンに斬りかかった。
「そうだ、あの日からずっと、兄ちゃんを追いかけてきたんだ！」
剣を赤い爪で受け流したデーモンは、サモンの腹めがけて、左拳を振った。
それに合わせるようにサモンはひざを上げて、向こうずねで拳を受ける。さらにその勢いを利用して後ろに跳ねた。
「いくぞディノ！」
サモンが竜の背中に飛び乗って、狭い空へと飛び上がる。
「ディノ？……召喚獣の本当の名も知らないとは。貴方それでも召喚師ですか？」
デーモンはそう言うと、左手を広げて力を集めた。その力は黒いもやとなり、次第に大きくなっていく。
サモンはちょうど男の真上にきた時に、竜の背中から勢いをつけて、さらに上へと跳んだ。
「らああぁっ！」
跳んだ先にあったのは半透明な天井だった。それを逆さまになった状態で蹴り、剣を突き立ててデーモンの脳天へと急降下する。
「見え見えです」
デーモンはすれすれの距離まで引き付けてから、一歩だけ下がって回避した。そこにサモンが隕石のように落ちてくる。
空き地の土が舞い上がり、煙幕のように広がった。
「まだまだ！」
土煙を払ってしまうかのような叫び声が合図となって、空にいた竜が火炎弾を発射する。それが土煙のせいで見えなかったデーモン

は、ほんの一瞬だけ反応が遅れた。
空き地を猛火が包み、その熱と光が辺りに広がった。
視界を遮っていた土煙が消えると、右手を上に広げて立つ、不気味な悪魔の姿があった。
その手のひらから、焼けた臭いと煙が立っている。
「なるほど。貴方は囮で、本命はこちらでしたか」
デーモンは距離をとった少年を睨み付ける。サモンは空き地の隅にケロッとして立っていた。
「……こりゃだめだ」
サモンは握っていた剣を放り投げた。その刀身はさっきの攻撃で折れて半分になっていて、片割れはデーモンの足下に突き刺さったままだった。
「降参しますか？」
「しないよ！」
その言葉に「ほぉ」とだけ反応したデーモンは、左手をサモンに向ける。
「武器を失っても、私に勝つおつもりですか」
サモンは体についた砂を払いながら言う。
「あぁ、兄ちゃんの居場所を聞くまでは！」
それを合図に、サモンは素手で走り出す。デーモンは左手に貯めていた黒い力を解放し、サモンに向けて飛ばした。彼はそれをヒラリとかわし、男に突進する。
すかさずデーモンは長い右腕を振り上げた。その腕の長さは、サモンの攻撃が当たる前に届くだろう。そのリーチが厄介だった。
「ディノ！」
サモンの呼び掛けに応じて、空を飛んでいた竜がデーモンの後ろから飛びかかった。
しかし、
「……甘い」

デーモンがくるりと向きを変えて、紅い竜を睨んだ。そして右腕を思いきり、地面にめり込むほどの力で叩く。
紅い竜は一瞬の悲鳴の後、ホタルの光となって四散した。サモンは竜がやられたことに苦い顔をしたが、勢いを緩める事なく男の背中に飛びかかる。
「だから、甘いのですよ」
デーモンが不気味に笑った瞬間、サモンの背中に激痛が走った。
かわしたはずの黒い力が、ブーメランのように空中でターンして、サモンの背中にぶつかったのだ。
「やはりまだ子供ですね……」
デーモンが呟く。だがサモンにはそれが聞こえない。
背中が焼けるように痛み、痛いという感覚以外を遮断していた。立っている事さえ叶わず、その場に崩れおちる。
「ぁ……っ……」
言葉にならない音を出しながらもだえた。痛みの限界がきたのか、まぶたが重たい。
薄れゆく意識の中で、なんの感情も抱いていない黄金の瞳と、壁を叩きながら叫ぶ少女が見えた。

「……サモン！」
リトルは目の前にある壁を突き破って、サモンに駆け寄りたい気持ちでいっぱいだった。
「サモン、サモン！？」
何度も名前を呼んだが、返事はなかった。地面の上をもがいているサモンは今にも死にそうで、直視するだけで痛々しかった。
それを間近で見下していたデーモンに、リトルは泣きそうになりながら叫ぶ。
「あなた、サモンの知り合いなんでしょ？　どうしてこんな事する

のよ！」
　デーモンはリトルの言葉を無視して、闘いで乱れた青紫の髪を左手で整えた。
「覚醒しないな、やはりまだ幼いか」
　そして、左手をサモンに向ける。その手に魔力が集まっていった。
「もうやめて、攻撃しないで！」
　また攻撃するのかと思ったリトルが、壁の向こう側で堪えていた泣をとうとう溢れさせた。
「……」
　それを横目で確認した男は左手の魔力を、白い、癒しの光に変えた。
　悪魔が放つ癒しの魔法は、サモンの背中にある傷と痛みを和らげる。さらに空き地を囲っていた壁も消して、デーモンは余韻を楽しむようにたたずんでいた。
「サモンっ！」
　リトルが彼の元へ走りよる。気は失っているが、表情は穏やかでほっと安心する。
　そしてリトルは、不可解な行動をとった男を見つめた。
「なんで傷つけたり、助けたりするの……？」
　その問いかけにデーモンは、気絶しているサモンを見ながら答える。
「サモン様には、死なない程度に死んでもらいたいのですよ。それが私の目的であり、狙いです」
　言葉の意味をリトルが理解できないまま、デーモンはフードで顔を隠して立ち去った。

　サモンが目を覚ますと、不安げに顔を覗くリトルの姿があった。
「よかった、気がついたのね」

リトルが安心してため息をつく。しかしサモンは辺りを見回した後、自分の手のひらを見ながらうつむく。
「……そっか、負けたんだな」
ぼそりと呟いたサモンは、手を握りしめた。強く、固く、何かの感情を表現するようで、押さえつけるように見えた。
リトルはただ黙って彼を見ていた。

さっきまで晴れ晴れとしていた空は、どんよりとした灰色の雲に覆われていた。

続く

## 兄と思いと降り始めた雨

魔法都市トールは土地が円形になっていて、外側から魔獣避けの城壁、居住区と裏街、魔法街に区分けされ、そして都市の中心にそびえ立つのが魔法塔バベル。登れば街の隅々まで見渡せる高い塔の屋根に、コールは風になびくロープを手で軽く押さえながら立っていた。

夕陽色の髪と曇天の空のミスマッチ。遠くから彼を見つけたなら、それは鈍く光る悪魔の瞳に見えるだろう。しかしこれから雨が降ろうという天気の中を、空を見上げて歩く者などいない。塔の屋根にたたずむコールは、うつむいて歩く人の流れを憂鬱そうな目で眺めている。

その曇った瞳は、回りと同じようにうつむいて歩く少年と、その横にいる少女の姿をとらえていた。

「……サモン」

コールの呟きは雷鳴にかきけされ、それを合図に天が涙を流す。

「必ず、お前は死なせないからな」

コールは雨に濡れるのもお構い無しに、少年の姿が見えなくなるまでその場から動かなかった。

兄の瞳は悲しみで、弟の瞳は悔しさで、今の空を映したようによどんでいる。

「明日はどしゃ降りだろうな」

コールは憂鬱になりながらつぶやいて、塔の屋根から飛び降りた。

## サモンと竜と二人の侍（前書き）

＊灘先生の「Ｖｉｖｒｅ　ｔｏｕｔｅ　ｍａ　ｖｉｅ」とのコラボを始めました。
ハヤト、ヒロキは灘先生の作られたキャラです。

## サモンと竜と二人の侍

家についてから数十分、サモンは店の屋根に上って空を見上げていた。相変わらずの曇天は雨をこぼさないように必死でかかえているようだった。

「サモンっ」

不意に下から声がする。見ると玄関からリトルが心配そうな顔で立っていた。

「先に寝るね。サモンも早く降りて寝なさいよ」

リトルは言い終わるとすぐにうつむいて、いたたまれない気持ちで家に入っていった。サモンは彼女の姿が見えなくなるとまた空を見はじめた。星一つの輝きすら見えない。

ポツリポツリと、雨の音がする。

「そんなに悔しいか、サモン」

耳に聞こえた男の声。それはあのデーモンの声にどこか似ていて、全く違う声だ。

サモンは声の主をポケットから取り出した。紅いカードがほんのりと光を発している……声はここから、頭の中に直接聞こえてくる。

「悲しみにくれることはない。お前の気持ちがよければ、いつでも飛ぶよ」

「……」

サモンは無言のままカードを降り下ろした。紅く輝きを放つ鱗がすぐに竜の形を作り上げ、共に戦ってきた戦友が現れる。それは主人の心に影響を受けて悲しそうな瞳をしていた。

「いこう、雲の向こうへ」

翼を広げて空を目指す竜に、少年は首に手を回してしがみついた。音もたてずに飛び上がり、ぐんぐんと高度をあげていく。高く高

く、下をみれば次第にゲンショウの家が小さくなり、大通りが見えて、民家からは無数の光が漏れて星のような景色になっていた。
さらに竜は上がり続ける。とうとう灰色の雲に突っ込み、雷があちこちで鳴り響く。サモンは目をつぶって数秒間、雲から抜けるまで耐えた。

そして上空。厚い雲の上にたどり着くと、そこには星が、地上でみるより数万倍も美しく輝き、一面に余すところなく広がっていた。
星の世界を竜はのんびりと飛び続ける。
「ありがとな、ディノ」
少年は紅い竜の鱗をなでた。金属みたいな冷たさと、皮膚のような温もりを兼ね備えたそれは、星の光を浴びて真紅に光る。
その上に、また雨が少し降った。

サモンが空から降りてくると、街の灯りも半分くらいに減っていた。円を描きながら滑空して降りていく竜とサモンは、行きと違って晴れた顔をしていた。
下を眺めて家を探していたサモンだったが、賑やかに声がする場所に目がいった。
「……ん？」
よく見ると賑やかというかなんというか、二人の少年を取り囲むように数人の男たちがぞろぞろと群がっていた。
「ディノ、あれ！」
直感的に襲われていると思ったサモンが、竜に目的地を指し示す。
その一言で竜は滑空をやめ、放たれた矢のように降りていった。

「うっ……」
「大丈夫かヒロキ！」
ハヤトは木刀を構え、敵を見据えたまま友を案じた。ヒロキはすぐに立ち上がり、汚れた袴をパンパンと手で払う。和服という珍しい姿をした少年は今、むさ苦しい男たちに囲まれていた。
取り囲む男たちは一様にみすぼらしい服装で、汚れきった服に穴の空いたズボンなど、決していい生活をしているとは思えない外見だった。やはり行動のほうも粗暴で、今も手に角材や木刀を握ってへらへらと笑っている。
「お前ら何なんだ？」
「俺たちは雇われ兵さ、あんたらの首にかかった賞金目当てのな！」
やっちまえというリーダーの一声で、少年二人に大の大人たちが飛びかかる。しかし彼らにかかれば、力だけで振り回している武器をかわして、体に木刀を叩き込むことは朝飯前だった。
たった一振りで迫る敵を凪ぎ払い、リーダー以外の男をいとも簡単にノックアウトさせた少年たち。洞爺湖と彫られた木刀が、闇夜に煌めく。
「おい、お前」
倒れた男の顔近くに木刀を突き刺したハヤト。耳元でドスッという音が聞こえて、男の顔から血の気が一気に引いていく。
深い緑色の髪をしたハヤトが凄みをきかせて怒鳴った。
「お前らみたいなのを『烏合の衆』って言うんだよ……おとといく来やがれ！」
その一言で敵の戦意は一気になくなり、男たちは尻尾をまいて逃げ出した。まだ戦ってもいないリーダーすら、仲間の逃走についていく始末だ。
「情けない奴等だなー」
ヒロキが言う。ちなみに少年二人はまだ十七歳、一回り以上も離れた大人の逃げる姿が、彼の目には滑稽に映った。
「だけどハヤトも格好つけすぎ」

「悪かったな……それより雨がくる前に帰ろうぜ」
そんな他愛もない笑い話をした二人は、木刀をしまい帰路にたつ。
その瞬間、ブォンと背後から土煙が上がった。二人は身の危険を感じて振り向くと同時に距離をあける。
「……おい」
「まじかよこれ」

少年たちの目の前で、紅い竜が翼を広げて吼えた。そんなに体長は大きくないのだが、突然現れたのと翼のおかげで、数倍大きく感じさせる。
初めて見る生物に面食らったハヤトとヒロキは、夜の街で思いきり叫んだ。

「なんじゃこりゃあああぁぁぁぁ！！！」

「あれ、終わったのか？」
サモンが竜の背中から飛び下りた。その姿にびっくりした二人がまた叫んだ。

## ハヤトとヒロキとミエリという母（前書き）

＊灘先生の「Ｖｉｖｒｅ　ｔｏｕｔｅ　ｍａ　ｖｉｅ」とのコラボをしています。
ハヤト、ヒロキ、ミエリは灘先生の作られたキャラです。

## ハヤトとヒロキとミエリという母

次の日。

「で……」

ヒロキは不満げに目の前で繰り広げられている光景を見ていた。少し広めの部屋にあるテーブルにヒロキとハヤト、そしてサモンが座ってご飯を食べている。

「さすがミエリさんの煮豆、いつもおいしいな」

「おかわりっ」

テーブルの上には手作りの料理が――肉や魚はなく、箸休めと漬物が主に――ズラリと並んでいて、それをハヤトとサモンがせっせと口に運んでいた。

ちなみにここはヒロキの自宅だ。

「よく食べるのね、作りがいがあるわ～」

キッチンからサモンのおかわりを持って、二十歳過ぎくらいのヒロキと同じ茶髪の女性が現れた。彼女は桃色の和服に身を包み、見事なまでに整った顔立ちとしなやかな曲線を描く体をもつ、艶(あで)やかで美しい容姿をしていた。

「ハヤト君以外のお友達なんてめったに来ないものね～」

そう独り言を呟いた彼女はサモンの茶碗にご飯を入れてあげる。サモンの注文で、白米を山のように盛って。

「ありがと！　姉ちゃんの名前は？」

「小宮ミエリよ。お姉ちゃんだなんて……嬉しいけど私は三十五、もうおばさんなの」

「ふーん、そんな風には全然見えないぞ？」

「ありがとう♪」

ミエリは笑顔を返した。この表情を見てだれが三十路を過ぎたおばさんと思うだろうか、というほど若々しい彼女は、実はヒロキの

母親だったりする。
「なんだかヒロキの弟ができたみたいね～。サモン君はいくつなの？」
「十八！」
「あら、それじゃヒロキのお兄ちゃんね。ヒロキ、今日一日サモン君のこと『お兄ちゃん』って呼びなさい！」
「なんでそうなるのぉぉぉ！？」
息子にむちゃくちゃ言う母親。しかもミエリは結構真面目に言っているので恐ろしい。しかしさすが母親というのか、ヒロキが怒るギリギリのラインを狙って話をするので喧嘩にはならない。
「サモン君、服も汚れて所々穴もあいてるし……あとで繕ってあげなきゃ！」
そんな中、一人熱が入るミエリだった。

それというのも昨晩の出会いの後帰り道がわからなくなったサモン。紅い竜は空腹で召喚できなくなっていたので空を飛んでいくこともできず、深夜に外へ放っておけないとハヤト達が家に泊めてあげたのだ。

朝食も終わりミエリは片付けに勤しむところ、サモンとハヤトは部屋でのんびりと過ごしていた。ヒロキはミエリの手伝いだ。
「いやぁ、旨かった！」
「ところでサモン、地図あるけど帰り道わかるか？」
「うーん……この街には旅で来たばっかりだし、ゲンショウの店としかわかんねぇな」
「ゲンショウさんのお店なら知ってるわよ～」

ミエリの声がキッチンの方から聞こえてきた。そしてすぐに彼女がこっちに来る。
「ここからちょっと遠いけど、ゲンショウさんの所へ行くの？」
「あぁ！　仲間もそこにいるんだ」
ミエリが「そうなの」と返事をしたと同時に、キッチンからヒロキの叫び声が響く。
「ハヤトー、手伝ってくれよ！」
「おう」
二つ返事でハヤトがキッチンに向かう。そのおかげで、部屋にはサモンとミエリの二人だけになった。

「サモン君……」
「何だ？」
ミエリが少し寂しげな表情で、サモンを優しく包み込むように抱き締めた。
「隠しても私にはわかるわよ、何か辛いことがあったんでしょ？」
「えっ……」
話してごらん、とミエリがささやく。彼女にはサモンが空元気でいることがわかっていた。
サモンは初めは不安と戸惑いで黙っていたが、ミエリの温もりを感じているうちに、氷が溶けるようにゆっくりと話し出した。兄を追う旅で、手掛かりのデーモンとの戦い、そして敗北。
「……そうなの」
サモンの話を最後までしっかり聞いていたミエリは、抱き締めたまま優しく言う。
「サモン君、戦いっていうのはね、勝ち負けじゃないのよ」
「違うの、か？」
「うん。本当の戦いは『何を得たか』が大事なのよ。あなたは確かに負けてしまったけれど、何か感じたものがあるはずよ」
「感じたもの……か」

サモンの心から、少しもやもやが取れた気がした。

「ヒロキ、なんで皿洗いに俺を呼んだんだ？」
「母ちゃんが二人で話したいってさ」
「ふーん」
人の気持ちを理解できる親子を、ハヤトは「いいな」と少しだけ思って見ていた。

「さて、あとは母ちゃんに任せて……」
大方皿洗いを済ませたヒロキが部屋を覗く。そこで見たのは、サモンのズボンを脱がせているミエリの姿だった。
「うおぁぁぁ母ちゃんんん！？　何やってるのおおお！！」
「あらヒロキ、終わった？」
「終わった？じゃねええ！！」
血相をかえたヒロキはどうしていいかわからず、ただ形のないジェスチャーを繰り返す。
「サモン君のズボン、ぼろぼろだから繕ってあげようと思って」
「はらひろ……へ？」
「ミエリ姉ちゃんは裁縫得意なのか？」
「ええ！」
ミエリは笑顔で答えながらヒロキの替えのズボンをサモンに渡す。それを当たり前のようにはくサモン。

空いた口がふさがらないヒロキの肩を、ぽんとハヤトがたたく。
「よかったな、兄弟ができて」
「よかねぇだろ！！　俺ァ修行行ってくるっ！！」

限界が来てしまったのか、ヒロキは大股で家を飛び出した。
「待てよヒロキ……。そうだサモン、お前も来るか？」
「修行？　面白そうだし行くぜ！」
二人もヒロキの後を追って家を出た。
さっきまでの騒がしさが嘘のように、部屋は静まり返っていた。

三人は裏街の最も東側にある公園へとやってきた。その道中サモンが見た景色は、華やかな大通りとは全く違っていた。
地面は舗装されておらず土のままでまわりの建物も古い掘っ立て小屋が並び、人の気配もほとんど感じられなかった。公園も同じように寂れていて、滑り台だったのだろう鉄屑と固くなった砂場、回りに倒木が並んでいてる光景は、とても子供が遊べる場所とは思えなかった。
「さて、今日はこの辺りでいいかな」
ハヤトが公園の真ん中で立ち止まると、サモンの腰の剣を見て言う。
「サモンは正直なところ、強いのか？」
その事はヒロキも気になっていたみたいで、サモンに背中を見せながらチラチラとこちらをうかがっている。
サモンは自信満々で答えようと思ったが、瞬間的にデーモンとの戦いが頭をよぎる。そして無意識に、喉元まで出かかっていた答えを飲み込んだ。
「……戦えねぇってほどじゃねーけど」
「そっか、なら手始めに下級笛でいくか」
ハヤトは懐から小さな笛を取り出す。それは勾玉の形をしていて、黄色に鈍く光っていた。
同時にヒロキが腰の木刀を抜いて構えをとる。その姿はさっきまでのふてくされた少年ではなく、戦いに挑む剣士に早変わりしてい

た。
「それじゃ行くぜ！」
思いきり息を吸い込んでハヤトは笛を鳴らした。その甲高い音は公園中に鳴り響いて空気を振るわせる。
ぞわぞわと現れたのは、黒い体毛のネズミ達だった。

## 喧嘩と風と狙いの刀（前書き）

＊灘先生の「Ｖｉｖｒｅ　ｔｏｕｔｅ　ｍａ　ｖｉｅ」とのコラボをしています。
ハヤト、ヒロキは灘先生の作られたキャラです。

## 喧嘩と風と狙いの刀

黒いネズミはどこからやって来るのかわからないが、公園の中央にいるサモン達の足元にうじゃうじゃと集まってきた。その数はざっと数えてみても数十匹以上いる……これだけ群れているとなんだか気味が悪い。

ハヤトが木刀を腰から抜くと、それは少し風を帯びて応えた。

「ヒロキ、いくぞ」

「おうよ！」

ハヤトとヒロキはほぼ同時に動きだし、手元の木刀を振り抜く。刀身に纏った風の力で、十匹近いネズミを一発で吹き飛ばす。一撃目は突風、二撃目は迅風、三撃目は旋風と、木刀を振るたびに威力も増して、瞬く間にネズミ達を吹き飛ばしていった。

彼らの戦う姿は風と踊るように、いや、彼ら自身が風になったかのように公園を舞う。

「っし、いくぜ！」

サモンも彼らに負けじと、腰に差している折れた剣を力強く抜いた。

折れた剣は一振りで数匹一度に……とはいかないが、一匹一匹確実に倒していった。

ただ効率が悪いというか、ネズミ達の増える数の方が倒す数より断然多い為に、見えているネズミが一向に減らない事にサモンは段々とイライラしていった。

「おーい、休憩するぞ」

粗方ネズミがいなくなった頃、ハヤトが木刀をしまって声をかけ

た。彼は汗を一つもかかずに平然とした表情で残りのネズミ達をけちらす。
「休憩、か……」
一方サモンは小さな敵に翻弄され、全身にびっしょりと汗をかいていた。性格上ちまちまと敵を倒す事が嫌いなため、ストレスもすごく溜め込んだようだ。
「お疲れサモン、意外と戦えるんだな」
「意外って何だーっ！」
ねぎらいの言葉をかけたつもりだったヒロキだが、爆発寸前のサモンに火をつける結果になってしまう。
「ま、まてよサモン、そういう意味じゃなくてだな」
「うるせー！」
「ハヤト助け……ギャー！！」
サモンは溜まっていた怒りを全てヒロキにぶつける勢いで頭に噛みついた。ヒロキが振り払おうと躍起になって走り回る。
「おーい、休憩だぞー？」
「あーもう怒ったぞ、このバカ野郎！」
「おらぁーっ！」
ハヤトの呼び掛けもむなしく、二人は兄弟のように喧嘩を続けていた。

「よし、休憩終わりっ」
休憩に入ってからきっかり三十分過ぎた。ハヤトが立ち上がってぐっと体を伸ばす。
「さ、続きやるぞ！」
ハヤトはそう言ったものの、隣にいる真新しいたんこぶやあざをつけたサモンとヒロキは起きる気配もなく、溶けたアイスのようにぐったりと寝転んでいる。

「もー立てない、疲れた」
「オレもだめだ……」
「派手に喧嘩してたもんな、お前ら」
あきれてため息が出るハヤトに対して、寝ている二人は清々しい表情で笑っていた。こうして見ると本当の兄弟みたいだ。
「オレ、初めて喧嘩した」
「初めて……？」
サモンの一言に、ハヤトとヒロキは首をかしげた。
「兄さんいるんだろ？　昔は一緒に過ごしてたんじゃないか？」
「そうだけど、兄ちゃんはいつも優しくて、守ってくれるような人だったから。オレも喧嘩する気なかったし、兄ちゃんもオレの言うことに反対しなかったからなー」
サモンにとって実の兄は尊敬の対象だった。それは兄と言うより父に対しての思いに近く、兄が旅立つその日まで、いろんな事を教わった師でもあった。
うっすらとだったがそれを感じたハヤトとヒロキは、おのおのでサモンの兄を想像した。

そこに数人の男達がやってきたのは、すぐ後の事だ。

「よぉー、ハヤトくん」
「ん？」
名前を呼ばれてハヤトが振り向くと、鉄パイプやバットを持った汚れた服の男達がにやついて近づいてきた。彼らは昨日の夜、二人を襲ったゴロツキ達だ。
「昨日も来たよな……なんの用だ？」
ハヤトが目を細めて睨み付けた。左腰に差す木刀をすぐに抜けるよう手を軽く当てて。
「あんたに用はねぇ。だがあんたの持ってるその木刀、そいつを欲しがる貴族がいてな……大人しく渡しな」

「やだね」
「……そう言うと思ってたぜ！」
ハヤトが即答すると、その答えをわかっていたように、ゴロツキ達は奇声をあげて襲いかかってきた。
「とんだ修行になっちまったなヒロキ！」
「こいつらじゃ修行にならないだろハヤト！」
二人は目を合わせて頷くと、木刀を力強く握り地面を蹴った。
「この木刀は渡せねぇよ！」
若い侍が吼えたと同時に、黒雲から轟音が響いた。

風を纏う二振りの木刀は、小さな竜巻となって辺りの敵を蹴散らす。ハヤトが切り捨てた敵をヒロキが踏み台に飛び上がり、ハヤトの背後をねらう敵に突風を繰り出す。さらに着地する場所にハヤトの魔法で竜巻を起こし、ヒロキを守ると同時に敵を吹き飛ばした。そのコンビネーションは抜群で、迂闊に近づけばただではすまない。
鉄のバットを木刀ではじき、棍棒を紙一重でかわす。そして空いた懐に渾身の一撃を打ち込む。防具と言える物をつけていないゴロツキ達はあっけなくバタバタと倒れていった。
「こいつら化け物か！？」
「くそっ……引き上げだ！！」
いくらも打ち合っていないどころか一撃もハヤト達に攻撃できないまま、ゴロツキ達はどたばたと乱れた足取りで公園を出ていく。
「口ほどにもねぇな」
ヒロキが木刀のみねで肩を叩いて呟いた。サモンと喧嘩した後すぐに戦ったはずなのに息をあげることもなく、さらにはあくびまでしている。危機感の一つも感じていないような仕草だ。
「そうだな」
そう答えるハヤトも微動だにしない物腰で木刀を腰にしまう。
「すごいなお前ら、二人だけで返り討ちにするなんて！」
少し離れて見ていたサモンが、小走りに近づいてきた。

「あんな力だけの奴らなら、百人来ても大丈夫だぜ！」
「イナバ……イヤなんでもない」
ハヤトは口走った言葉をかき消すように続けた。
「あいつらこの木刀を狙ってたけど、心当たりあるか？」
「いや、全くないぜ……。この剣のことを知ってるのも俺たちくらいしか居ないからな」
手に持った剣を不安げに見つめたヒロキは、首を振って返事をする。
「隠し事か？　オレにも教えてくれよー」
ひょこっと二人の間に割って入ったサモンがうつむくヒロキの顔を覗く。
「お、お前には関係ないだろ」
「けちー、教えてくれたっていいだろ！」
サモンは怒ってまたヒロキに飛び掛ろうとした。が、公園の入り口から話し声が聞こえてきたので、ふと目をそちらに向ける。

「ラクエルさん、こっちですぜ」
「随分寂れた場所にいるんですねぇ」
さっきのゴロツキのリーダー格の男と、細身で長髪の優男が近づいて来る。細身の男は純白のカッターシャツを着て、腰に小太刀をぶら下げていた。髪は背中の真ん中辺りまでまっすぐ伸ばし、半分開いた目が不気味に光る。
「ほぉ、あの少年達がぁ？」
ラクエルと呼ばれた男が隣のゴロツキに確認する。
「そうです。しかし奴ら、中々手強くて」
「そうですかぁ」
細身の男は腰に差した小太刀をゆっくりと抜く。刀身は銀白に輝き、つばは切っ先に向かって獣の牙が伸びるように、四つの棘が生

えている見慣れない形をしていた。
「それじゃ、お疲れさまでした」
「ら、ラクエルさん、何を……？」

その光景を目の当たりにしたサモン達は戦慄した。

ドスッと鈍い音と共に、小太刀がゴロツキの腹を突き破り、つばに生える牙が食らいつく。
「ら……が……！？」
「お疲れさまでした。そこでゆっくり休んでいてくださいなぁ」
ズボッと刀が抜かれると、五つの穴が空いた懐を押さえながら、血だらけのゴロツキがその場に倒れた。
「……何やってんだ、あんた」
ヒロキが小さく呟く。それを聞き逃さなかった男は、三人に向かって軽くお辞儀をして挨拶した。
「お初にお目にかかりますぅ。私、ラクエルという者でして、今日はある相談にぃ――」
「だから、何やってんだよっ」
「よせヒロキ、あいつはきっと貴族だ。手出ししたら只じゃすまないぞ……」
貴族。それは国を越えた権力を持つ血筋のことだ。力の大小はあるが貴族は全てにおいて一般市民より優遇され、国のルールも通じない、逆らえば簡単に殺される、暴君の総称だった。
「よくご存じですねぇ」
ラクエルが濁った瞳でハヤトを見据えて近づいてきた。
「ただ私は、ここに争いに来たわけではありません。いいですかぁ？　私は貴方と取引に来たのですよぉ」
そう言ったラクエルはポケットから一枚の紙を取りだし、ボール

ペンと一緒にハヤトに差し出した。
「好きな額を書いて下さいぃ。私が欲しいのはその鉄おも切り捨てる木刀『洞爺湖』、最強の武人『白夜叉』が持つと言われている宝剣ですよぅ」
「……あんたがゴロツキを雇った親玉か」
「そうですが、使い物になりませんでしたねぇ」
ハヤトは渡された紙を見た。そしてラクエルという残忍な貴族を。隣で怒りを押し殺すヒロキとサモンを。
答えは一つしかなかった。
「わりぃな貴族さん、これは渡せねぇ」
ビリビリと小さくちぎった紙を投げ捨て、目の前にいる男に言い放つ。
「これはあんたみたいなやつが持っていい刀じゃないんだ」
一瞬の硬直のあと、ラクエルはふぅとため息をついた。
「じゃあ頂きますねぇ……命といっしょに」
貴族ラクエルの持つ小太刀は、血にぬれて真っ赤に染まっていた。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2029r/

---

召喚師の旅路

2011年10月6日03時31分発行